

當世の
 流行
 者
 世の
 名
 特代世
 世の
 名
 特代世
 世の
 名

当世の流行者世の名特代世世の名特代世世の名



東京
 出版
 社

近江源氏先陣館

右大臣實朝公
 政子の方
 北條相模守時政
 佐々木三郎兵衛盛綱
 片岡造酒頭春久
 比企判官能員
 三浦之助義村
 時政娘時娘
 遺酒頭娘住の江
 婢女瀧波
 宇治の局
 源の頼家
 若狭の前
 佐々木四郎左衛門高綱

片岡我當
 岩井去ヶ松
 中村芝翫
 市川四郎
 片岡我當
 市川四右衛門
 尾上菊五郎
 助高屋高助
 岩井松之助
 澤村清十郎
 河原崎國太郎
 坂東家橘
 坂東三津三
 嵐璃寛

大江入道東元
 四斗兵衛實和兵衛秀盛
 八藤軍治
 鬼山會平
 新開次郎
 高綱妻高火
 小四郎高重
 小三郎盛清
 盛綱妻早瀬
 佐々木微妙
 花岡園部之助
 疑漢盆太

片岡市藏
 市川左團次
 中村鶴藏
 中村銀之助
 澤村田之助
 市川八百藏
 河原崎國太郎
 嵐和三郎
 市川りんご
 岩井紫若
 中村仲藏
 中村荒次郎
 坂東喜知六
 (以下略す)

俳優の等級を拘らず
 役名の出願を寄る

近江源氏先陣館

○鎌倉伊所の段

新玉の春立初て伊園の樹々も縁の四方の波静けき君が
 伊代どくや然ハ右大將頼朝公奢平家を西海ふ切領源氏
 一統の伊威風偃伏草の鎌倉御所太平の地を占玉し時へ建
 仁三年正月元旦の伊壽二代の君右大臣實朝公立烏帽子
 小緋の伊裝束白書院ふ出玉へハ上段ハ龍頭の兜を飾伊
 母公政子の伊方武將の祖父北條相模守時政公先君頼朝よ
 り天下の執權を預り孫君の伊後見伊年輪も六十餘州自然
 と握る三騎其外關八州の大小名烏帽子素袍も腰々て袖
 を聯ぬる大廣間伊蓋蓋の大流小流襟側ハ申樂れ役人祝
 儀の開闢相勤め誦ハハ老松梅々枝ハ弓矢立合弓取の列を
 正して出勤有愛ハ近江源氏の嫡流佐々木三郎兵衛盛綱伊
 前近く召出され實朝仰ける様ハ(實)其方儀ハ頼源秀義
 より二代の家人殊ハ近年忠勤を抽で勤功他ハ超たり随つ
 て近江國ハ元其方古郷なれば一國を施行ハ問江州へ赴

「一圓小領地致すべし」と伊院の趣き承ハリ謹で平伏
 し(盛)不功の某し身ハ餘る伊恩賞有難く存じ奉る只一
 ツの伊願ハ某し弟佐々木四郎左衛門高綱兄弟共ハ先陣
 を相勤し弟高綱ハ伊恩賞なりしかハ一徹の生質恐な
 ガラ先君を恨み奉つり且ハ兄の某しハ遺恨を挾み十ヶ
 年以前鎌倉を出奔して行方知す哀此度の次手ハ弟高綱ハ
 在所を求召出され江州の内ハ分地拜領なし下されハハ
 猶此上の君恩ハハ「と恐れ入て言上す北條嚴范爾
 と打笑(時)道理のハ條然乍ら此度伊邊を江州へ遣すハ謀
 計有ての事其故ハ先君頼朝薨去の後嫡男乍ら左中將頼家
 卿情願の生質故ハ弟實朝ハ武將を越られしハ心外ハ
 思ひ鎌倉を立去て京都へ引込早三年頃日ハ謀反の催し
 有との風聞江州ハ京都五畿七道の境關を固めて東國の軍
 勢を防ぐ用意有と様々の噂伊邊の器量を見立江州へ登向
 さするハ此方より先を取て京都を押ゆる謀計中ハ其方
 ハ弟佐々木高綱ハ軍法の奥儀を窮め陳平眼良も劣ら

ぬ勇士行衛々尋佐々木兄弟江州を固める用意肝要なり」
と有けれバ(盛)ハ畏まり奉つる弟高綱兄弟心を一致ふ
せバ假令何なる大敵も暫時の中は取捨ぐハ方寸の内も有
珍賢慮安く思さるべし」とお請の詞も政子の方々墨附を
給ひけれバ盛綱三度頂戴し時の面目身も施し珍前を立て
退出す。折節慶問ふ案内して。京都頼家公より珍禮の使者
参上しと相述べ(實)夫待兼つ早是へ」と仰次第云傳へ
鎌倉の附家老片岡造酒頭春久京都の近習比企判官能員遊
下つて愚從立ての若侍三浦之助義村十八歳の角前髪諸
士ハ式禮衣紋の着形不怖憶せぬ一器量人ハ勝れて見えふ
ける。時政珍禮ヒ(時)年頭の服儀早速の参着満足せり併
乍ら頃日心得ぬ人の取沙汰殊々頼朝珍他界の後京都へ退
き度し使者を以て鎌倉へ請待すれ共今ふ於て下向なく酒
宴遊興ふ日を送らる。放埒の行跡片岡を付置上ハなど諫
言も致さずや是なる武將實朝ハ我孫祖父時政天下を後見
する上ハ武將同然の時政を侮り輕んじやざる。頼家の心

腹夫も隨ふ諸士の胸中旁々以て心得ず」と凛然たる嚴命
み恐れ入たる造酒の頭心を察し政子の方(政)人の胸を取
上れば天道の事途も恨纏るハ下々の習ひ分て頼家ハ自ら
と繼し中古殿頼朝様の妾嬖宇治殿の腹も生れ給へバ妾
み隔の有様み人の云なし鎌倉を狙ふの珍謀叛の由なき
事を聞度み自ら胸の苦しさ推量せし片岡」と仰み發せ
頭を上(遣)我等儀ハ鎌倉より京都へ添置る。附家老何方
み詣り何方み偽をす上へさ様もなし頼家公鎌倉より下
向無ハ元來多病のお生質珍殿を離れ珍他行たふ稀成ハ珍
疎遠の段ハ指て趣意有事も有す實頼公時政公兩將お對
して恨み給ふ珍心毛頭なし珍謀叛杯との雜説恐ろしく
身持放埒の珍咎嘲ふ違ぬハ一ツ若狹とや白拍子を殊
の外珍寵愛成れ妾嬖お引上られ夜晝分す酒宴の興強てお
諫すせ共一切珍用ひ是なき故人の惡説を重るも元ハ好色
の珍誤り是連も若氣の習お齡たふ長じ給ハハ自から政ま
らん此儀ハ我等に珍預け置かひ奉つる」と事を飾らぬサ

條比企の判官進出(判)一々頼家公ハ珍謀叛の心全く
無どの云れまい正しく頼朝の珍物領を差置時政公指圖と
して孫の實朝公を武將ハ立祖父君の後見ハ自然と四海を
手も握る北條殿の計ひと疑ひ懸りし宇治の方頼家公ハ親
子の心餘り無理とも存せぬ」と舌三寸で内端から比企が
底意不審き聞兼て造酒頭(造)珍前をも彈らす尾籠の詞
見よ上段お飾置れし兜こそ源家の重寶龍頭み敵方打
たるハ大將軍の珍印此印を實朝公ハ譲り置給ひしこそ
頼朝の明智の眼夫を今更併官と珍謀叛有べら様ハなし珍
邊如の佞人お傍る徘徊する故頼家公のあのお身持(判)
一官まいお身持の善惡ハ附家老の珍邊こと知答夫さへ知
ぬ造酒頭頼家公ハ珍謀叛の心ろ若有たら何とする」と争
ひ尋る無道の判官末座お扣へし三浦の助直と出(三)珍前
成る鎖られよ最前より兩人共何の詮無争ハ頼家公ハ珍別
心の有無ハ及ハぬ事凡謀叛とハ下より上を討んと計
る是を謀叛人と云若けれ共頼家公ハ正しく先君頼朝様珍

惣領時政公ハ今武將の祖父君おもせよ元珍家來ハ相違
なし頼家公憤はり思召事有ハ時政公ハ切腹有と仰られて
も御事何ハ怖畏て珍謀叛ハ成るべき下から思ふ私した簡
扣召れ判官殿」と一句お鎮る三浦が才智人ハ感ずる計り
なり。時政珍機嫌斜成す(時)三浦の助是ハ參れ」と珍坐近
く(時)其方未だ面を見知す若年ハ似合ぬハ器量の若者よ
な今よりえてハ遺酒頭同然お心ろ借なく往來せよ對面の
臉夫」と三浦の助が名お寄て義弘の一腰引出物お賜ひ
ける誠お當座の肩目なり政子の方閑雅お必解て(政)自
らも此上の悦ひなし人の胸も取れ成も互ハ縁の遠さかる
故なれハ縁お縁を重ねる爲幸ハ時政公ハ局牧の方の腹お
出生の乙の娘時姫を頼家の北の方お備へなハ京鎌倉の
和順の臉此上なし是自らお願ひ」と仰せ時政打點頭
(時)政子の發明太平の瑞相左有ハ頼家公寵愛の若狹とや
らんを退出し其後時姫を送るべし媒介ハ遺酒頭(造)ハ畏
まり奉つる」と領掌すれハ實朝公(實)今年則ち頼朝の三

廻忌南都東大寺にて追善供養執行へば政子御前も宇治殿も此靈場にて對面の上婚姻の契約有る靈魂も浮世に供養の催し諸大名相心得よと浮世意も皆退出の谷七郷松倉郷の拜領お郷も入てり吉村夕心々の三麟北條殿の智慧の海底計りなき鎌倉山浮代の榮えう(三重)久方の

○東大寺供養の場

八重櫻散敷法の東大寺總進補使の普提を吊ふ結掃工を盡し金銀瑠璃破璃錦の戸帳回廊石垣悉皆五色の織絹幾重お包庇日お耀く粧ひは是彌陀經を寫されたり扱又千僧万僧の修經の聲澄渡る三尊爰よ來迎うと殊勝成ける事共なり。此度の導師建長寺の前住榮西和尚朱の衣も最尊く兩人お打向ひ(榮)今日(浮)兩所とも誓固のお役目嘸浮太儼伊天氣快晴ふて愚僧も甚だ満足と挨拶有る造酒の頭(造)賦ふ今日(浮)苦勞千萬上々も浮世に則ち浮法起ふ浮出座も有可成其女儀の事不淨も如何浮世慮有某し宜お計らふ旨懇懇お相述る詞曲比企判官(判)假令何様な吊

袖揺直し兩人(和尙)の詞お從ひて休足所へど入ふけり。供養の修幕打榮し北條家の乙の君時姫修養頼朝の後室お姉妹の名の有る浮腹替り末の子お後れて咲し姫御作らぬ木形手入す何國へ枝の振の袖都まゆき風姿なりお傍女中多き中片岡お娘住の江(住)浮覽遊ばせお姫様京鎌倉の大各方此廣い境内も埋る、計の賑ひ賑ふ浮父時政様よりの仰出されお前を都へ浮縁組遊ばすとやら今日お約束が定まる管嘸お悦びでふりませうと浮出(姫)、無情の縁定めや頼家様よ若狭殿逆浮寵愛の妻嬖其中へ嫁入の懇路の中を裂き行人の恨如を何樂みと有るの、と仰せお傍の灘波(瀧)住の江殿未な事頼家様御殿の殿様那様頑固し大將の嫌ひ今度お使者の其中で極上吉瑞角前髪都への嫁入より疾くら姫様のお心三浦の方へ走船偶然事ハ状多の機でも機でも行悪荒磯の岩侍(住)、堅い程お想いの思の増ひ浮道理(瀧)お其堅みを打碎してお手お入たら敵の城を落たより大きな手柄住の

ひも亡君何のお悦び何故と被仰れ先君浮逝去の跡目(當)時實頼公(是)政子の方の若殿又宇治の(局)お部屋成共頼家公といふ物語を産落されたが修羅の極弟お天下を乗取れ何の快氣らふ夫お何ぞや縁組の取言のど様々の取言役柄も打忘れ媒灼の取持願見も中々腹筋と取ても付ぬ置言耳も懸す和尙(造)近頃仔細有て京鎌倉の浮縁組お取持仕つるも何卒國家の無事を祈る某し浮推量下されと事を破らぬ一言お道理なりと感る知識判官(判)笑(判)腐穢も結(結)る、自体鎌倉よりの附人風お局のお氣お入ぬ(彼)方へも此方へも陸廻す練氣武士(造)傍若無人の雜言然云和主が不忠の臣(判)何々何と(造)主人も諫も奉つら毒を吹込邪心非道(判)舌長なり聞捨成す願骨ぬて切下る(造)小癩(癩)と立掛(新)何事と榮西和尚中を隔(榮)太切の供養の場所若乃傷みも及びな(後)日の言譯如何成る、短慮至極と押鉄め供養の時刻(間)も有暫らくお休み(先)々」と進れ(互)お摺合大紋の

江殿の片岡の娘浮能計(無)ういな(住)何様したら能らふと三人小首傾けて戀の評定無分別(住)斯様ぢやとこの其堅藏の三浦殿お姫様と云て(お)主様の云号のど猶以て六ヶしかる其惚人お妾が成て堅い所を碎いたら夫から跡(お)姫様の浮威光輝しお遣付る天の川も媒介の舟が無れ(渡)さぬ慮で妾が妹脊の根取(肝)心の三浦殿妾や終(逢)た事(瀧)其逢ぬが調度幸ひ(向)ふ(來)古文字の案袍(違)はぬ三浦殿(瀧)急お成て來隨分首尾能生捕て高名見たいと女中達姫(猶)しも恥かしの森の木隠れ蕪の内斯(知)ぬ使者男俊風流の角髪(三)浦之助義村のつし(真)目お掛烏帽子案袍の袖(春)風のそよと音な(内)意の使者(三)宇治のお局より時姫様(使)とし(參)上誰をお取次頼入と云入れ(幕)より(住)暫くお扣なされよと物賄付るも戀の仕懸(知)ずして三浦之助案袍の角髪十面作り待間媚(住)の江(出)合頭お義村を(見)ても見ぬ目の心意氣是戀知の驗なり。三浦之助謹んで

(三)宇治様の仰せふに今度酒頭媒灼を以て時姫様と主君頼家縁邊の浮契約未浮興へ入ねども嫁子と云ふ心安さ偶お賞ひし儘果六寺の名香最珍か成音も少な心計りの贈物浮慰と下されよとの浮口上浮前宜く浮披露」と帕包みを取らせ(住)是れは浮叮嚀な浮口上とすお使者柄とす浮持參の香よりも色香の深い戀知の可愛らしい風風を見るお思ひの勝り草(三)是々浮奏者拙者への浮挨拶より早くお上へ使者の旨趣(住)聞な开して、浮元服遊ばさねば定る浮内室様へ未ふりすすまいな(三)左様部屋住同前の三浦之助妻迎へ持ませぬ(住)左様なら内障ふ云換し成つた優美らしいお方々有かへ(三)且以々戲言おつまやらす先お取次く」と差出包の手を固密(三)是何成る無作法千万此三浦之助終ふ女中と手から物取換した事も無家中の格式浮坐興も事お因放し召れ」と突退れ(三)躰き其所お轉乍ら袂を扣(住)「お京家のお格式へ知す女中方へ又女中の格式此幕の内へ時姫様の浮殿同前女中



浮殿へ殿達がお使者にお出成る、からの此方の應接にお付成れぬや成すまい夫がお氣ふ入す、此お取次へ得ぬ(三)夫へ迷惑女中方の禮義へ不案内な拙者無骨の段へ了簡有て浮口上早くお傳へ下され(住)「お妾者を侮つた成れ方妾も武士の娘此様お突刺されてア痛く持病の癩ダ」と苦む風情拗振見ると知ながら女子相手に短氣も出れずお藥上んと用意の印籠(住)「お氣の知ぬお前の藥如何も妾へ(三)疑ひ深い、此通り」と毒見の金打(住)「お心慮見ました」と戴きく(住)此お藥お前の手うら受ましたお祝言の杯蓋同然女夫ぢやはいの」と抱き付(三)是へ又強いお願(住)「醫文三浦様何程堅く成れてももう斯成たら厭悪と云ふぬ(三)我迎も岩木より有ね共(住)左様ら應へ入りすすな(三)夫へ(住)厭悪と仰しやりや何時迄も此妾者お癩へ直らぬ(三)六ヶ懸仕込だ癩堅く見る、刀の手前此方も替らぬ媒灼、此印籠の重々情のお禮へ斯」と締返す手の和き口覗き溢れて妙をも

(三)「三浦様密固の長門印籠漸々蓋が明たサアお出」と突出れて雲間より松の葉越の隈洩て勝ひさせ、愕然仰天(住)逃ても逃さぬ眞の惚人の其方お覺の有お姫様のお名の返事へ厭悪と云れま」と押遣色の門違ひ戀の身代り住の江が餘り工合が出来過て何やら偶然氣ふ成る怪氣も成ぬ辛氣顔時姫へ猶面伏(姫)住の江を頼んで其方の心を引見るも思ひ詰た自らお心を推して叶」と手を取給へ飛退り(三)頼家様と浮縁組のお姫様夫故只今お局より(姫)「お其使こそ自らと浮縁の無と云印香の煙の色も無移香海を籠とる縁の切ると云心妾や嬉」と宣へ(三)「お警浮縁の切る共天下の後見北條家のお姫様我等お味お掛られしと世の人口も勿躰なし思切下されよと低頭三指住の江差出(住)如何様被仰りや其處有矢張姫様の頼家様へお嫁入遊して筆と妾と三浦様ナヤ」と密添へ(三)「何所へ」住の江殿左様得手勝手、此方々爲ぬ如何でも斯様でもお姫様へ迂遠」と両方を無理お配劑

じ加減調じ合せて目出度と噉く中へ。伶雨所ふ成」と知
せの聲驚き外す三浦の助姫の名残も鴛鴦の離れ難なき後
影見送く是非無もお寺の方へ入給ふ。案内も同じ東西
の難殺せて政子の方宇治の局も氣高さへ吉野龍田り月雪
の光合たる風情なり(宇)是へく政子様侍佛前へ御焼香
も相濟しう誠お今日の追福も貴女と自ら伶一所お巾ひ
や山麻蕨君もお嬉しく思召ん」と有ければ此方も兎角
伶挨拶(政)三年と過る年月も無量の浮世懐しの今日の其
日」と計にて互の袖も玉翻す露こそ手向まりけらし。局へ
專測れ入(宇)老生不定の憂事も誰何時の世始しぞ我君
此世も在坐ば自ら事若事今の思の無物を一生埋れ果
なん」と悔涙の如ぞと心も障る政子の方(政)「喃宇治
の方、武藏野お見る月も腫が伏屋の濁り江ふ宿りし月も
元一ッ所々の風雅おより詠も進んで其時々を弁へて世上
お付が宜さふな物でけ無う」と直へ(宇)是の伶道現然
乍ら春の花咲冬に雪天道四季お私しなし時を乘順を廻時

宜も作法も無時節(宇)「左様思すのが心の併み尤も頼家
殿も君のお胤と云作ら妾腹成ば是非なき不運、其母く
の品位に替るとも頼家の物領成すや兄を指置弟、少上に
立ふと云事(政)「有共く假令乙も生ても君の妻たる
自ら産落したる實頼を世も立るの、天下の控殊更子の
母も寄て母し和女へ誰そ伊藤祐親の娘成すや現在我君と
仇有中怨敵の孫娘お答も有答を却つて君のお情かつけ
い観樂榮曜の餘源氏の跡を繼んど、鴛鴦の巢を梅が枝お
掛るより遙の事申中や及ばぬ叶へぬ」と云込られて喝と急
立(宇)「聞悪し一言女でこそ有頼家を一度武將も立て見
まやう(政)「いりりやや蝗蝻が斧同然取る、なら取て見や
(宇)「取いでへ」と襦袢因持せし長刀互も抱込、くくと
詰寄し、野分お騒ぐ萩萩の亂れ合たる如くみて、明事社と
妙婢女手よ汗握る寺中の騷動佛の會坐も忽ちお條羅の街
へ駈來片岡待たく、と氣も狂亂押隔て動手坐し(造)「
情なき伶有權伶雨所の伶争ひへ偏、天下亂、端此伶心付

さる事淺猿の伶所存や殊更今へ亡伶魂祥月の伶命日其お
位牌の伶前みて斯る不良賤の女の伶争ひへ何事ぞ國家の
爲を存る故京都鎌倉伶縁を結べ、自然と和伶伶代の基礎
然有バ草葉の亡君も無な悦ひ在坐ん操の鑑思さすや不肖
の臣が胸膈を苦しめ碎く、千變万化九牛が一毛も聞し召
分られて向卒和順なし給へ」と割つ口説つ波落くく
涙へ忠義隨一の上よ立たる武士の諫み誠を顯はせり「榮
西和尙徐々と伶弟子引連出給ひ(榮)兩後室へ恩僧が伶異
見是ふて悟り下され」と持せし一軸傍なる松の小枝みせ
ラ、と掛(榮)何と伶覽成れしか天の時正ふ至ると云文字
兎角天下を治る、天より自然其人も與へ給ふに有せんハ
中々治る事能す既も取て今日追福、奉つる右大將姪ご小
嶋の流滴も後ふ、天の時至り六十餘州の物追補使伶跡目
の伶迹懐か互ひお遺恨と成バ彌く、伶代の爲成す駕と伶
台点成れし、と出家堅氣の一行和尙も名もし建長寺清
潔とまら異見なり。政子の方理も眼し(政)先君の伶追善

ふ無端云争論妾夕睨り、喃宇治の方必す必も懸られな
(宇)何が扱只今の無禮へお許し下され」と互ひみ和く伶
挨拶遣酒頭頭を下(遣)懼り多き諫言を伶聞入下されしな
伶恩ハ重き細石巖と成し伶代方取見せ奉つる直様追善
佛事終れば伶前ふる率伶歸館」と進れ、解ぬ心を禰借め
包む式禮政子の方片岡和尙伶見送館を指て歸らる。跡
み局の張詰し心の怒止兼千々お碎くる思案の跡。始終の
様子三浦の助姫の助手を支(三)日も夕陽も斜なれば伶
立さふ」とすす、徐を傍も歩行寄掛奉つる雌雄の名劍
小嶋の手扱(宇)如何も義村泰平の臉を見せんと頼朝様此
東大寺へ納め給し此劍雄劍自ら雌劍の、其方是を帶せん
良劍を撰び來らん夫迄の、勘當成ぞ」と一振を指出し給
へ、(宇)「云ふや及ふ先君の伶恩を忘れし北條一家の權柄
納ると云ども再び用を成べき時節近きふ有とのお心おひ
な(宇)「云ふや及ふ先君の伶恩を忘れし北條一家の權柄
我儘鎌倉山の月影を餘所お跡て頼家を日影の花となし果

其口惜し何計り警浪路の干瀉と成候湯玉と返るとも恨り晴し我心推量せよや三浦の助(三)實も理り透し承知仕る」と同く寄て掛置し弓矢追取奉つる(三)一、傍覽せ彼一軸天の時正に至ると云中なる文字こそ恨の目的ならん只一矢ふて傍懸憤散し給へ」と義村が的を外さぬ黒星(字)「心得し」と打番ひさりく引絞り手先上りふ切て放せば過たず文字の只中發しと響暮の鐘お立の行列主従が別れ勇で(三重)立歸る

○頼家公御殿の段

實治れる例ふの松小松の生添て枝お枝葉葉の榮之契盛せぬ源や傍酒の機嫌も頼家卿晝夜分たぬ舞踊お傍屋從が笛鼓白拍子ふ若狹逆器量も吉野櫻花戀しき人の君様と舞ふ事寄頼家の膝み凭る嬌態よう濡事の吉端めと傍から囁す囁子方舌々呷と響あける。大將傍機嫌斜成す(頼)何時見ても美麗の器量お連る扇の手如何も不堪若狹の前此頼家少北の方(若)「其お願ひ委うら何時く迄も其通

夫待兼し是へ通せ對面せん」と仰せの下傍前間近く立出る佐々木四郎左衛門高綱名おのみ聞し武士の行儀亂さず平伏と。判官佐々木打向(判)對面致す初めなれを名の聞及ぶ高綱殿此程より貴殿の行衛尋ね求る其仔細ハ軍法智略隠し無佐々木四郎左衛門へ我君密にお頼有度一大事有ての事よも違背の有まじ」と探る詞み莞爾と笑ひ(高)先君頼朝一天下を切治草木も動ぬ今の世に軍衛武邊も益無事と跡を晦し山林お引込たる佐々木高綱今改めてお召出し泰平の世お武を忘れぬ名將の傍心懸委細の儀傍尋ア及ずお頼の一大事高綱承知仕つる傍心委りるべし」と泥す濁ぬ辨舌の水を流せる如くなり嬌態相人お偵の大將(頼)「強ふ遊び少飲て来た佐々木を母お目見さし若狹其後でハ蕭條とハお來いの」と大將ハ帳内深く入給へ(高)然らば後刻」と判官お賦禮式禮高綱も奥にお供し入ふけり。又も妻者少聲として。傍前様より仰せられし佐々木四郎左衛門高綱只今伺公致せし」と聞て能員

り必ず替給な」と又濡掛一表比企の判官お前出(判)君も知し召る、通り片岡諸共鎌倉へ下りし處心得難き北條殿の所存何時合戦有んも知す正りの爲の便も味方お招く諸浪人中も佐々木四郎左衛門高綱こそ今の世の軍師渠が行衛を詮議致し此方の大將とせ、此上や有べきと母上の庇庭を受世を連れ住佐々木が在家此程より尋捜す人数の手配殊ふ又遣酒頭が計ひにて北條家の娘時姫殿とハ婚禮を取結ひ退付館(参る)治定傍祝言と有時若狹殿の爲も成す何とハ思案の有まいか」と聞より頼若狹が顔色見て取頼家(頼)大事無く片岡が美圖でも和女を退て頼家が妻と定る者ハ無、何判官我思ふ所存も有ば片岡出仕致す共與ハ殿へ通すなと侍ひ中へ付堅く禁制たるべし由屋從共より渡せ、若狹構すと一獻酌サヲりど流去や」と大將の色お心も乱糸繩掛りし片岡が難儀と更み白書院取次の侍お能出。お召お寄て佐々木四郎左衛門高綱お次お扣へ罷有通しヤさんや」と伺へ(頼)

(判)「何の事只今目見した佐々木四郎左衛門二人有る管のなまし、聞えた名有武士共召抱へ有時節を考へ匹夫下郎の街事何もせよ仔細ぞ有ん是へ通せ証明さして賢否を糺さん用意有侍ひ中」と遣戸口お身を潜め握り詰たる柄の間も心と配る高綱の春待兼し黄鳥の初音を颯ふ心地して徐々ど入來り(高)召お應じて佐々木四郎左衛門只今参上仕つる取次頼み存する」と聞も取す判官とレと指圖お双方より取付二人を引搦み何の苦もなく投退れり同じく掛るも右左伝と云して寄付ね(判)院意なり」と判官が聲お偵がの高綱も猶所お付込家來腕を廻せと追取卷(字)「暫く」と傍聲掛立出給ふ宇治の方お別れし玉櫛筒未光潤な色も香も障らば落ん袖の露(宇)「兼て聞得し佐々木四郎左衛門自らこそハ頼家お母宇治の方顔合すハ初め成也昔に返る主従三世今より頼家お力と成偏お頼味方の軍師(高)ハ畏まつてハ得共左程お迄某しを懸望有引替り傍家來中の今の醜態(宇)「其不審の理りなれと味

方の士卒を靡す高綱其手練を見様爲(高)、「此ハ侈陀と
も覺す身不肖の某し成とも正かの時の軍師ふも頼成れ
んとの心ふハ引替劍術柔術の技術あて佐々木が器量お
試し遊さるゝお計ひ左様の武藝ハ一人ふ敵する端武者の
業軍師の器量ふ足す憚り乍大將の侈堅慮薄くハ」と武
威を恐れぬ弁舌骨柄割符を合す二人の佐々木心一ツお奥
戸口屹度淨目を附従み破て云れぬ此場の時宜(宇)、「一言
一句ふ備りし軍師の量器頼母し」此上ハ頼家お目見さ
せ上事緩慢ふ奥の間で主従の杯蓋事ト妙共佐々木を早ふ
伴なへ」と仰み頼と高綱も威勢ハ雲ふ立上る龍ふ翹や虎
の間の侈前を指て立て行。掛る折しもお庭の内下れく
も和かな妙女共口々に(妙)見れば花を商ふ人さふなぐ
爰を、何所ぞと思ふ添けなくも源の頼家様の侈殿共憚
らず仲間衆が見付たら大抵の事ぢや有まい早ふ侈門を出
やしやれ」と呵る詞も媚さし。侈免く」と手を支(百姓)
ヤサン女中方私ハ近郷の小百姓島の際ふハ此如く花

を擔ひて賣歩ま通る度々此侈殿外から見ても見々結搦
盡めを見るお付、内み道入て見度事ぢやと思ふが一圓眼
ても呵人なく道入掛た侈門の内是が何と出れませう連も
の事お篤りと入さして下さりませ」と云つゝ立て行んと
す判官聲掛(判)、「何奴なれば尾籠干万侈前様のお傍近く
慮外致さハ一討」と呵飛され愕然し籠より取出梅の花判
官が前み置(百姓)、「お免されて下さりませ侈前様が輕々
と出てゐるとハ夢も知す、勿体なや」侈前様の執成
で拜して下さりませ其代り此梅を進ませうヤサン賣餘り
でハムりませぬぞへ物の云ねと此花ハお詫の種の一枝」
と云せる果さず(判)、「見掛お寄ぬ胸性根の太い奴武士を
捕て嘲哂する憎い類柄縊めて呉ん」と飛掛目鼻も分す丁
々と打度毎る散梅の落花狼藉厭なく胸とせせ手ハ見せ
ぬと突放されて今更お返す詞も塵打拂ひ(百姓)、「往まま
よ」慈悲専らと思の外然とハ酷いお衆達何は結搦な着
物着て仔細らしい顔召れても斯當りが強ふてハ侈出世ハ

成ませぬ尊い寺の門前から往だぐ勝で有た物運入て見た
さよ痛目した命が物種お去バ」と、眩く立出る。夫繩打
と宇治の方侈聲掛れば能員が取て引立無二無三下緒把線
て小手擲権威お恐れ詮方も投首してぞ居たりける。比企
の判官取取す(判)彼様の奴等が徘徊致し侈前様のお身の
上惡様ふ觸歩行愚人めらへの身懲ふ首打放し成取の手本
み致ひん」と聞も敢す(宇)如何様其方の云やる通り下
として上を計らひ頼家や自らが旋を轉る者有ハ假令助入
百姓でも生置てハ政道立す仕置の手始め其者の自らハ
手を下し手打する覺悟せい、喃能員斯も狼お入込ハ外
面を守る役目の誤り詰りくの遠侍ひみ守殿敷中付俱ふ
心を配るが第一、妙女共其方違ハ奥へ行自らハ腰刀早々
是へ持來れ」と仰み生た心地もなく(百姓)「オ奥様今の様
みやたのでお腹が立バ幾重もヨヤ女中方詫して給」と
惴々聲願へど如何な寛の判官(判)「侈前様ハハ自身のお
手討(宇)、「云ふや及ふ只今其方ハ次へ婢女共早ふく」

と宇治の方の腰さ下知お能員も其儘立て入おける。圍ま
れし今ぞ命の置所屠所の歩の羊より響時計ハハツも過七
ッ何とウ女子共晃然渡る腰刀侈前み直し置立て入さの月
ならで花ふ其口を置露の涙と共に(百姓)「オ殺される此
命惜いと思ませぬが今爰で切れたら跡に残た女屋子が
路頭ふ立ハ知た事一人と思と親子三人見殺にして何の益
何卒お助下され」と拜み度ても後手ふ轉擲めし有様を見
遣此方も打疊消くさせんと下立給ひ(宇)「歎慕ハハ理り乍
ら助られぬ其方が一命時移る程思の思源家の大將頼家が
母宇治の方が手お掛るを果報と思ひ諦めよ」とスラリと
抜たる刀の光怖々密と顔打眺め(百姓)「如何でも此方殺
す氣ウハ是非お及べぬ逆も切れる上りウハ潔く死に見
ませう其代又此方様も淨潔とした刀の切味、切しやれ
と突付る體の捻お宇治の方屹と目を付合點と丁と切たる
腕の手中解る纏目お愕然し(百姓)「是や切れたのハ纏計
スリ殺しや成れませぬウ(宇)「何のいの生て再び自ら頼

度事有て殺と云たハ皆嘘人前作し心を見や」と刀ハ鞘ふ
納れ未納らぬ胸の中慮如何もと兩手を突(百性)百性
聲の私し頼み度と被仰る譯ハ(宇)其方ハ惚た(百性)
「今日程恐しい事を聞日ハない長居したら何様なめ
遇も知ぬ最おまハ」と立上る(宇)「お咎さぬ云出うらハ金
輪際縦何方の花にもせよ其一枝ハ自ら折して給」と藤
ひ寄取手お纏て(百性)「滅相な女だてら男お惚ると云様
不遠慮な事少有物う怖や怕しや」と振切く「迷惑
ふ道を選で宇治の方(宇)夫なら手討み過度う(百性)「夫
ハ(宇)否なら此懸叶ハ」と退引させぬ難題ハ返答ほうと
行詰(百性)「夫なら、詰でふります、お前様も入ぬ物
好、したク何様でも不束色事ク當世の流行物貴女も公
家様の娘ゆなら我等指詰痛腹必ず切して下さりますなへ
夫ハ左様ぢやク何様云お心で惚さしやました譯を聞して
下さりませ(宇)然ハいハのふ君お後れて已やれ貞女の道ハ
背うじと思お違ふ起臥ハ契置ふし乱言思出せし床の中

只一人兼の手枕お深き思を打割て云べき人も有なんと武
士即人の分なく入込せしハ幾万人數も限ぬ其中今日と
云今日其方の顔一目見より懸草の闇を縫行益より憧るハ
宇治ハ袖袂下行水の流れさへ外ふハ漏す人もなき妾ハ
所お密々忍び男と云ハ云ハ打解て給ハの」と密着濡る
雨ハ下又と有まハ此懸路在所育の麥飯で釣れし鯉ハ淀川
の七年物と知れたり(百性)「ハハ其お心何時迄も必ず違て
下されませ(宇)「何のいハ一日惚を上うらハ武士ハ
勿論高家でも如何な觸ぬ肌と肌其方と合すが互の固めハ
お來いの」と打連て上る疊の裏表ハ片岡造酒頭出仕なり
と呼ハるハお發と仰天此方ハ人音すれハ詮方なく隠し
所も宇治の方襟け開と忍襦袢ハ宿る下影お身を潜て
窺ハ居る。春の日脚の長廊下板敷の音聞雅ハ武士の鑑の
大廣間夫と見より(造)「發」と座を立隔て造酒頭謹んで
兩手を突(造)「お前様只一人心得難き館の構殊ハ只今
侍ハ中ダヤを聞ハ片岡造酒頭へ通すまじと遮つてやせ共某

し嘗て合点參らず所存如何」と尋る中(宇)「其仔細
ハ某シク云聞さん」と立出る大江の廣基入道東元頭計り
ハ圓けれ角差立る眼付真中ハ助手座(基)「邊一人奥
邊殿ハ通さぬと云仔細聞るハ及ハぬ貴殿の胸ハ覺有今度
の使者鎌倉へ参り乍ら其役目ハ遅滞ハ及ハ刺ハ時政の
娘時姫を頼家公ハ娶さん杯と旁々以て心得ぬ心慮然ハ依
て邊前より仰渡さるハ右の條ハ云譯有ハ云聞ん」と席を
打て詰掛れハ(造)「夫ハこそ片岡ハ深き存所此度鎌倉ハ
立懸事の動靜を窺ハ所時政の心慮如何しても其意得難ク
其儘ハ指詰ハ終ハ兩家戦ハの亂を押し其爲ハ北條殿
の指圖ハ隨ハ時姫を乞受しハ酒邊一家の縁深く自然と和
睦ハ及ハ治定底を以て片岡ハ三々條の邊不審ハ只禮禮ハ
て事を納め立歸て動靜を聞ハ宇治の方ハ身持武士ハ勿
論即人百姓毎日ハ入込せ邊目お留りし者逆ハ邊所
お引入させ放埒情弱の邊邊で出たる時ハ酒頭頭端と懸る
胸の戸も明て一人唯有て諫言ハ者も無クハ是非も無次第

やと思お任せぬ片岡ハ體ハ泥ハ理共ハ心懸せぬ魂ハ知
し召れぬ事ならハ再び生て歸まじ穩ハ成ぬ鎌倉の大事を
前ハ置乍ら色ハ濁れ酒ハ長ハ世人口ハ懸ると云覺れハ勢
の後先ハお心付て只一言頼家公ハ異見の杖共成へま
邊身思留つて給ハれ」と思ハ疑たる片岡ハ諫る五體ハ汗
平袴も浸計なり。宇治殿氣色を變給ハ(宇)「自らハ身
持放埒町人百姓を引入るとハ跡形もなき胸を取上貞女
の道を背しハ無名を立る推參慮外女と思ハ侮つてハ詞
ハ過るハ造酒頭(造)「ハハお心ハ障ハ其儀ハ幾重ハハ
宵免ハ返すハ頼家公ハ邊祝言の邊此縁入を變改有ハ
最早和睦ハ叶せして亂ハ及ハ今此時節ハ邊賢慮廻らせ時
姫君の邊事のみ偏ハ願ハ奉つる」と我身ハ替て祝言の納
まり願ハ四海浪豐ハ見ぬ風情ナリ入道東元頭驚らげ(基)
同じ事を俾々と主人ハ向ハ尾籠の行跡ハ有ハ引立
と呼ハる聲長まつた」と比企の判官淡わらハ(判)是ハ
片岡鎌倉方の因循姑息云譯もても返らぬ事往端ハ無得

立すハ立きて呉ん」と立掛るを腕首搦て眞逆様見向も遣
す摺寄て(遣)假令お答装る共厭ぬ〜此上ハ頼家公へ直
ふお願やさん」と云間も有せず入道ダ。推参なり」と打掛
る手裏劔丁と身を替へ小柄の鬘て宇治殿の禰禰現み〇〇、
く小手打込れし以前の男一座の鷲生中お隠立して川霧
の願れ渡る宇治の方暫し詞も無りしダ(宇)取しや遣酒頭
最前の其方の異見面目なさも愛苦も思れぬ程可愛の眞實
惚た忍び男女子の因果も堪忍して必ず阿て給んな」と詫
るハ武將の母若天下晴たる身持憫て何とせん片岡。
入道も苦笑ひ(基)頼家公の母公仕度事成るダ武將の威
光難ダ何とヤ者ダムら片岡ダ押付難お得心無り知て有
と身ダ取次して呉ふ次(立や)と權柄頭破り易く守るハ
片岡。結ぶハ早の懸の殿三ふ別る奥の問ひ笛のひしきも
大將の機嫌取々敷の音銀燭臺の影高く輝き渡る斗なり。
若秋の密と奥の隙出る後ふ東元ダ聞共知す獨首(若)焼待
衆の咄を聞ハ厭首止たさうな是と云も入道様のお蔭、

添けない〜夫ハ引替片岡殿妾ダ爲るハ戀の仇(基)いや
其敵ハ外ふ有(若)エ、外ふ有と被仰るハ(基)エ、憚を知ねハ
不審道理君を大事と思込れし志しダ切成故入道ダ語て
聞ん近ふ〜」と小腰ふなり(基)何をう包ん其方の仇と
成可人こそ館の後室宇治の母方(若)エ(基)エ、憚然ハ理り
〜、情なや武將の母と云るハ身ダ下主下郎を引入て、
寝殿に不義密通の私官先君頼朝の汚恩を忘る人非人鎌倉
よハ頼家公謀判なせと無名を立るも昔宇治の方の不所存
から此人を生置てハ頼家公の汚身の仇家の爲天下の爲汚
身密ハ寝所ハ踏込一刀ハ討て給(若)エ、是ハ滅相な事計大
事ハ〜殿様の母若殺どの勿体ない(基)エ、すりや此方ハ
頼家公ダ大切おハ無う大切ならハ後室を殺のダ眼のお爲
よし〜是程の一大事口外ハ出くらハ最早暫時も猶豫成
ず此方ダ得救すハ身ダ手ハ掛て家國の禍ハを拂ん」と奥
を目標て駈入乾相(若)エ、喃待て入道様(基)待どの此方ダ
討所存(若)エ、夫ハ(基)エ、何ぢや」と迫付られ(若)夫

なら宇治様殺せせう君ハ深度殿様を大事〜お整れて同
じお主と云乍らお家の爲お替られぬ仕候てお目ハ掛ませ
う」と口お云さへ勿体涙胸お急くる若狭の水(基)エ、出
された適〜夫ハ社頼家公の北の方は此刀で清潔と、那
囉子の終ぬ中時を過ぎず台点(若)必得ました」と脇袂
み氣も太鞘の白拍子目釘漏して忍び足窺ひ〜入姿。見
やる眼も笑壺お入邪智を隠せし胸算用一人點頭思案の後
奥より憑然〜以前の男思ハす撥たり(百姓)ハ、是ハえた
りお敵されて〜と行過る(基)待々汝台点の行ぬ奴四夫下
郎の身を持て後室お近寄不敵やつ汝も生てハ歸されぬ覺
悟して居をろふ(百姓)エ、是ハ又迷惑な花買ふ来たお庭先
で後室様のお目お入たハ私ダ花の科此方くら仕掛た色事
でハなし畢竟汚前様の汚悪性様乍ら私ハ何ふも(基)エ、吐
すまい夫計で無汝最前から何ぞ聞たて有ふがな(百姓)エ、
夫ハ聞たても無聞ぬでも無(基)夫聞たら敵れぬ」と、リと
扱て切付るを脇息追取丁と受(百姓)エ、何と成れます(基)

ハ汚前様を誑しお家を亂と大罪人観念致〜と又切込
鏢元丁と打落し脇腹伝とだぢ〜透す駈寄比企の判
官主ハ誰共手裏劔お。ギヤツと一發敢なる最期見向も遣
す一間お向ひ(高)真禽ハ木を見て栖大將の器量を撰み此
程民間お名を隠す近江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱
今日只今頼家公の汚味方軍師となる時至れり家來刀」と
詞の下、ハ、一度お立出る姿も一對二人の佐々木入道
が愕然不審様子如何と窺ふ中指出す大小追取て床几お勵
平座したる面体主從替らぬ三人佐々木三國一の勇士なり
汚劔携へ宇治の方汚脱びの聲高(宇)六十餘州お一人の軍
師待置たる甲斐有て今と云今手お入ハ味方の礎。大願
成就頼朝様より傳りし雌雄の劔と号たる二振の太刀軍
師と頼上ハ手渡する雌の劔士卒を靡す采配と〜と蒸々敷
手お渡し(宇)心得難さハ大江東元頼朝様の汚恩を受頼家
の師範共付置れし身を以て何恨有て鎌倉ハ内通ハ致せし
と仰ハ東元起直り(基)存じ寄ぬ汚疑ハ鎌倉ハ内通とハ何

を以て(高)「く大江殿悦まじ兼てよ
 り北條家お心を通ひし透わらば頼家
 滲親子を害せんとする貴殿の底意争
 論れぬ證據ハ最前我手に受留し小柄
 の手裏劍片岡目當小打と見せて正具
 の狙の的ハ宇治の方で有ふがな
 ハ、其時我手お受すんハ宇治の
 方ハ其座で落命夫のみ成
 ず貴殿の娘を若狭と云白
 拍子お仕立頼家公ハ
 放埒を進るハ鎌倉ハ
 内通の證據お隠し有
 な」と一言ハ三寸生
 板釘打如く(轟)、偵
 の佐々木能見付た嫡
 亂不義の宇治殿を殺さんと謀し



ハ家の爲と思ふ故又白拍子若
 狭ハ我娘とい何を證據(高)「其
 實否ハ谷村小藤次西宮六郎主人
 の下知ふて鎌倉の様子を窺ふ忍
 の犬妾腹の娘若狭の上より扇
 が谷の郷お預て置れた事迄聞振
 て来た此方の勝「く白狀」と詰掛ら
 れて偵の入道返答遅る障子の内太刀音丁と
 韓紅お白拍子が首引下立出給ふ頼家公退て
 敬ひ奉つれば寛然たる滲氣色にて(頼)京鎌
 倉と隔りし此頃の人心ヲ兼たる我放埒今
 改むる手始ふ成敗せし此女他人の手ハ長生入道ハ娘とハ今日迄其身
 も知ず始て聞て身を悔み覺悟の最期主を謀天罰我子ハ報ふと知たる
 う」と常お變りし滲定意ハ一句一答赤面し思ハ無念詮方な自害と見
 れハ高綱押止(高)ヤン暫く假も先君頼朝より若殿ハ滲師範と名を
 付られし大江入道心を改め忠勤有ハ生害ハ及まじ一旦内通の貴殿



なれば所詮生て「置まい」と思ての覺悟成んが佐々木四郎
左衛門高綱軍師と成上り貴殿如きが幾万人内通しても苦
み致さぬお心遣ひは「無用」と人を育てる大器の詞東元初
めて生たる心地(基)實も「今」の命を戰場めて我君の
奉つるが忠勤の第一指當て修近習の比企の判官打止たる
曲者忠義初に生捕て修覽あ入ん」と立端の雄辯辛いめみ
大江入道唐犬の逸吠してぞ入あける。大將重ねて(頼)佐
々木を軍師と招きし上り母君諸共日頃の念願時將あ至る
の爰急ぎ士卒を指招き修覽如何」と有ければ佐々木高綱
暫しと止め(高)修覽ふいへ共北條家おの修存知なき今
日の次第を次の間お窺ひ待たる武士一人對面致せし上の
事」と家來を近付(高)「兩人汝達の宿所お歸り我身の
上を告知せ早く」と追逼て突立上り高聲お(高)鎌倉
よりの付家老片岡造酒頭佐々木四郎左衛門高綱見参さふ
と呼はれ、襷を掲て造酒頭出る後お組子の侍以追取巻を
事共せず(遺)最前斯と見極し我推量お違なく扱こそ佐々

木で有しよな」と云間有せき左右より捕たと聲掛寄所其
手を直に引掴み(遺)斯も君より修不審の掛り繋る鎌倉お
足を留たる造酒頭繼主君の修意成共滅多お繩お掛らじ」と
と彼方此方へ動乎云せ(遺)臣の臣たる道を盡し君を守る
が習と云を疑ひ繋る我成へ只此儘お出城して再會お重ね
て」と又も組子が打掛る十手透さず引奪肩間真向打割て
云ぬ互の胸と胸。宇治の方修聲うけ(宇)過て疑へば人と
供む亡と云と意地を磨へ武士の道お外し造酒頭再び歸り
逢坂の關を破るお破らじと其方一人お留めし」と仰の中
より佐々木高綱(高)味方お有て一方の旗大將とも成へ
き修邊其儘出城せしむる事虎を殺して竹林お放すとい
云乍ら我又斯て有中の何條事の有可ぞ」と合戦お及ぶ時
何万騎お寄るお高の知たる端武者共四方お亂るを尖
先揃へ振首梨割鐵炮の音も烈し味方の軍勢君の威勢を
真向おさしも功有鎌倉方响と寄手の勢おて勇お掛れと
數多の士卒諸葛お術をなす迎も我方寸の計略おて其所お

も佐々木此方おも佐々木くど名を觸し爰の森影彼所の
堤追詰く時吸お泡吹せん高綱お胸お納し軍の備お詞
涼敷云放せお造酒頭亮爾と打笑(遺)我ども先其如く君
お疎れ君臣の禮義背し上から日本國お引籠り旅參せん
易けれ共未代此身の環境お成我懸名も清潔と流せば其名
も楯の板只何迄も忠臣の必ず二字を忘るゝな」と味方お
付とも付ぬ共善惡二ツを一道お納めて歸る造酒頭。去
くお高綱おは親子勝お與と口。東元お載配おて造酒頭
を縛らじと柱差股纏廻し通さぬ道ぬと舞いたり(遺)「性
怒も無有罪餓飢残す失い」と聲掛る。物な云すな揚よ」と
右衛門左衛門お打て掛る鼓お奥の問話の拍子舞延年の時の和
歌是なる山水の落て懸お響こそ秘術を盡て争ひしお償の
大勢堪り難逃散後お我武者の二人抜合て切掛挿沈んで筋
斗打せ直お腰骨踏付れ。道と取付組子お要所仕留し
何者と見遣後の障子の中衣服取め佐々木高綱(高)判官
を打留て我を畜ひし小柄の返禮受納有」と高綱お立る勇

者の道々お奥の安宅の舞諸疾々立り弓取の心敵お造酒
頭暇おて去よ迎策よ有ぬ相生の祝言おへも三々九段
云譯何と片岡お虎の尾を踏毒蛇の口通さぬ佐々木お四目
結結お顯す四天王其隨一と鳴渡る鏡も清潔(三重)夜嵐の
○道行旅路のぬれ衣
要事の司を問へ世の人の懸と旅と有明の光お空お彌高
き北條時政の深窓お秘相娘と持離す名も時姫の時お合鎌
倉山を後おなし都路指て嫁入の道お東路懸路お他へ夫で
外して歩行路の野面限なり傳きの中を隠路お江路を必
的の供々お傍去すの住の江お助け参らせ玉鉾の道な
らぬとや四方山の障お濡ん小夜衣裾吹拂お春風お露踏分
て進り行村お續ら果しなく物思ふ身お若草お碎半花土筆
も目お添で棄越の灘の符お我を追かお怪まれ木の關懸
れお立忍ぶ其方の方より一群の行來の中お聲高く捕の安
賣山計贈お都の伊達参商お盤に敷有日月晝夜満千の盤
動と寄來浦波お須磨の上盤抽馴衣松風村雨一荷おして行

平是を嘗給ふ赤穂に名高垣の色雪より白く此如く富士の
山盛安が一徳押合へし合隣のお玉や向のお林が翻れ掛て
我等が袖を固密と捕へて搦の目の懸路の柳が計り無き召
くど口上ふ夥多の行來興ふ入笑ひを残り行過る被現
ふ姫住の江義村様うと見合す顔素知ぬ形お行袂二人の願
て右左廻り留めて○コヤ左程難面お心ど知ぬ妾が愛思ひ
都の方へ嫁入も父の仰是非なくも其場を紛れ落人と斯
成行を可愛やと少の思ひ給へれ」と口説給へば住の江も
興ふ妾が種々口説給した其上でお姫様への媒妁を後で
思へ味な氣お縛る糸や青柳の乱て今ハ託ち草花と櫻の二
思ひ色香を分て咲た妻手を取々やいたどりの離れ難なき
萬紅葉絶口説を大丈夫の心へ空お春の風吹分らる、袖袂
放ちへせじと篠原を彼所此方と付纏ひ乱る、青紅のの
入日の浪と見え隠れ木の間の櫻波路くく春の最中の
雪下し花踏分て(三重)

○高宮村出茶屋の場

根を付し」と懸腰ふ先肩もひやうまづき(仁)ナア馬鹿
盡すやら汝と相棒するが最期常付の立場でも氣ふ入ねバ
すつとこな酒屋さへ見りや何度でも休みたさうな類付夫
と云も酒度うら何様でも汝ハ聞及んだ鱈の鱈鮫の再来う
酒香童子の春爛りいげちない酒好」と追合く、ヤト竹興
御せバ、くお休みく」と亭主が詞お懸腰の垂上て床几
へ歩行寄十河頼の軍武士怒々ど押直り(軍)ナ後肩の者は
へ参れ最前汝に云付たハ急用の有身我なれば立場を扱て
はッ付よと云を通りお精々出た極の外お褒美を呉る聞バ
汝酒好どやら亭主ン渠めお酒を香せよ」と降て浦たる
幸ひハ行手の好物完備と笑を含んで竹興の鏡威さく、兩
手を突(四)エ、適れなお侍ハ極極の外の褒美おハ五十三十
増の鏡下さる所を酒と出たハ又遠ふた物ぢや大將く何
と仁作よ是見たう」と云を打消相棒仁作(仁)ナ旦那結構
な珍意なれとア同じ事なら餅が能酒小餅つて餅の徳年の
始めも鏡餅重ねて神の二柱取ひハ茶粥の柱共腹の減事遅

近江のや鏡の山へ影遠き高宮の村端に漂りて爰お時姫君
住の江諸共憂旅ふ憂戀人を見失ひ慮よ爰よと立懸ひ(姫)
コ喃住の江其方の世話で漸々と廻り逢た戀人お振捨られ
し我身の上推量して給いの」と涙先立託言(住)ナ、お遣
理く物堅い義村様でも木竹でハ有まいし此方の心が屈
いたら何は難向男でも情心が出来さうな物何おもせよ
此邊を尋るお如ハなしお氣遣ひ成れな」と力を付る其折
柄後の方より同勢引連北條の家來關口平太姫を尋る弄々
眼斯と見付走り寄(平)時姫君ふていな歩行簡知ざる故方
々々尋お迎ひお参りたり住の江殿も歩供有卒お出」と
サせとも(姫)ナ、鎌倉へ何面目お歸るべし」と厭給へバ
關口平太(平)片岡殿の思慮有て悪敷ハ斗ひサさぬ由是非
歩供と住の江も供お引立大勢が吾妻路指て急ぎ行。雨の
山坂花見りや灣る花見りや灣る花お思ひがよいとこ思枝
まやんとせ(四)ナ仁作狼狽たり此酒屋お懸籠立て親方お
もお茶上い休所で休みるせずヤ奈落の窟迄昇込うい性

いなり第一竹興お酒香すハ嗅み地黃を吞すも同然何所
どの程でハ乗人の身お怪我が出来るハ知た事酒を頼と止
みして餅お成れませぬけい餅お成るが上分別」と下戸と
上戸の得手勝手咽ハ鎌倉街道の食争ひと見えおけり。侍
ハハ苦笑(軍)ナ其方おも望み次第何成と支度致せ(仁)ナ
有難い珍意お出たハ懸腰しや此店ハ酒計りて餅ハな
し(亭)ナ力を踏すまい堤の餅屋も此方の出店後肩殿ハ、
窓からお指圖次第お香だがい、く来れ」と亭主が案内
お相棒ハ已存分喰ふハし旦那ハ懸腰様取五文取をと
急ぎ行の後肩ハ立上り勝手知たる賣場のお酒有合柄を益お
丁と汲移し(四)然ハ旦那喰ます(軍)ナ見事ぢや樹で香
う何お香を呉たいな(四)ナ、西くお香ハ持て居ます先一
口」と角香おがくく、一息懸腰の胸引明て取出
す番椒(四)ナ旦那珍意おませ肴ハ是で能うります、何と
やら、夫と摺子木も紅葉仕おけり番椒此紅葉とお肴」と
一口喰ふて腹と干(四)ナ心地飽く、不堪はいな旦那些

お願ぐらいます(軍)「願ひど何事ぞ(四)いやは最外
の事でもしりませぬ最一ツ是で食ませうかどや事でもしり
ます(軍)「い、何其上を未香か、切々殿しい上戸だな
何程なりと勝手おせよ(四)「有難」と立上り手酌の計り
思ふ儘丁ど汲で(四)「又喰ます今度の最一息ふ」と斟引
抱へ蛇蝎の流の流れを香しく侍ひ顔(四)「香けな命
々未是うらぐ酒なれど如何もまても不作法千万、此邊で
入ませう、切とや慮外ハ免些慢々地とやませう」と
芝ふ轉と邯鄲の枕入すお早御仙人界も斯やらん。時刻移
れ侍ハ立上つて身撥へ用意の内お都路と吾妻の方へ急
の武士顔見合せて(曾)貴殿ハ八ッ藤軍治殿(軍)「い、曾平
殿」と時の挨拶双方互ふ禮儀事終り八ッ藤軍治殿低め
(軍)貴殿の浮主人大江入道殿兼て鎌倉時政公へ内通の
忠臣京家にてハ出取の入道殿鎌倉へ内通との神も知ぬ味
計相互三日めお透一の浮女通定めて貴殿も此方の主人
へのお使ひならん(曾)如何も、仰の通り主人大江油

イヨ下郎め汝が名何と云何國の村に住居致す(四)「い、
替た事のお尋ね我等住居ハ何所とも定らず此街道でこん
もりと籠茂つた森の分ハ慮外乍ら拙者ヲ寮所又名が聞
成れ度ハ本名の雲介又替名が香助香助ハ二斗三斗未其上
も食ますお依て頃日ハ名が替り四斗兵衛」と何所でも
やますて「又本お酒ふ於てハ天晴の手柄者何様でも叶ま
い」と半分云さし慢々地睡り軍治立寄(軍)「い、く眼を覺
さぬう」と引起せ(四)「合点ぢや、く、く何と
仰やる我等お香を致せり、最私ハ大無器用者惣籠昇串と
酒香より外ハ何おも存せぬぢや、何予遣たいが、此間子
供等が街道筋で諸ふ歌聲えて居たがやてんやの皮やつて
退よりいおまん股藏へ太々神樂が飛込だ未鈴振て刻込だ
ハ、」と餘念なき鬼山寄て(曾)「イヨ下郎め諸語云すと吃
度聞格別お其方お頼み度仔細有」と聞て四斗兵衛起直り
(四)「私にお前方が頼度仔細とハ(曾)「其方が命が欲し、
イ、其方が身軀を呉い(四)「曾)「、露の道理、只今此

断なく京城内の爲跡万事具お上る頃日京都頼家公ふ
ハ諸國の武士を狩集め密々の評議有其儀お付てのお使ひ
幸はひお途中の對面双方の状を取替一刻も早く歸國せん
(軍)「尤も」と兩人が互ふ密書の箱取替懐中きて立上り
鬼山曾平四邊を見廻し(曾)「是は軍治殿兩人の外人なし
と一大事の物語り見れば彼所お伏たる下郎何者やらん」
と尋れ(軍)「涉不審ハ尤も渠めハ拙者を當所迄昇て參
つた籠籠の者喰ひおれて、通り、もう精神もない下子下
郎氣遣ひ有な」と聞も敢ず(曾)成程熟醉の跡なれど下郎
ながら渠めが人相邊しい生置置よも必置時節お洩てハ一
大事拙者宜敷計ハん、彼様」とハ八ッ藤お喚けハ打點
頭兼入し下郎が傍へ寄耳近く愛張上(軍)「い、曾平の者
用事が有目と覺せよ」と呼ハる聲、と兼覺の醉機嫌(四)
「ハ、何様うと存たら最前のお侍ハ樹、未、香と云事ぢ
やな、おまつさら一人ハ香せぬ一寸お間を頼まようい、
お指成れませ」と寐ても覺ても酒の事鬼山ハ直と寄(曾)

涉方と主人の密事を談事合咄終つて後を身ハ酔臥する
跡なれど兩人が不覺の第一密事を聞すとも此儘お拾置
てハ我々が後日の誤り是非がないと諦め命を呉よ」と聞
中ハ四斗兵衛ハ猶愕然(四)「櫛子聞程肝が潰れ興も酒も覺
果ました成程左様お仰やるから、定て譚ぐらふけれど
何おも聞た覺えもなし又私ハ、嗚も有倅も有今年八十三
ふ成母者人も、ます何は雲助致しても大切な命お免成
れて下され」と哀を作る空悦罷るより外詞なし軍治怒つ
て(軍)「何所へ、最前住所を尋し時所々の森お寐ると
云た、汝ハ知た宿なし絶跡絶命覺悟せよ」と刀閃と抜
放せハ、呀と飛退(四)「夫うら仰ませ私ハ、聞分て
下さりませ最前家が無と云たハ酒の上の開放題度家も
ムりますア思ハ、此様な無法な事に出合のハ、恐星が當
つたのか何おもせよ此身の因果乾淨と諦めて命ハ上ます
が只今もや通り今年八十三ふ成倅や六ッふ成倅も眼乞
一寸諦して下さりませ」と逃出す後通さじと。肩先掛て

一刀切たか飛たり古井戸へ異逆様み落込たり。鬼山透さ
ず手頃の石片古井戸へ打込く筒と見(會)マ斯仕たら氣
遣ひなし思の外脆い奴お互お安心」と八ッ藤も刀を鞘ふ
納め(軍)存じも密に下郎お掛り思ハす時刻延引是よりの
夜道を掛國元へ急がんと猶も何角を駭じ合互ふ禮義兩
人ハ京と東へ別れ行。始終の様子最前より小影お窺ふ捕
賣長兼差足まで歩行寄井戸へ落たる下郎こそ只者ならず
不審く試みせんと兼てより仕込柄も穂長の鎗井戸も立寄
逆路し一發突込手鎗の手筈透さす板取鎗の穂先はつくど
折しハ扱こそと猶豫中お井戸よりぬつと出る件の親
籠昇上るや否やハ打と打穂先の手裏劍長兼ハ眞俯向ふ倒
れ伏四斗兵衛の見向もせず何う心み打點頭堰臥くど懐
中手村道指て行過る。後ハ長兼假死の鎗の穂先ハ手お
留むつくど起て身繕ひ早暮渡る空の色曲者ハ行道筋を遙
く見やり見定めて後を慕ふて(三重)追て行

○四斗兵衛住家の場

呼掛たハお身(四)ハ私でムります(可)私だど云其様ハ
誰ぢや(四)誰ぢやとハ餘所くしい扱ハ先日ハ強いは馳
走ハ預つて添けなふムります「くお道入なされませ」と
云れて合点の行ハ奴無理お伴ハ内お入(四)夫くら一寸お
禮お参らふと存じたれど貧乏隙なしでお禮さへ延引女房
共彼方も能お禮すて奥此中彼方で結構な料理を振廻れ
其上結構な酒を強られ夫ハ「近年のは馳走お禮せ
く」と涙多無性お覺へて根くら覺のない奴(可)「是さ
ハ何の事だハハ手前ハ何も振廻た覺ないぞ(四)ハ扱物
覺の悪い彼程振廻て置てエ・是や其振廻しでもせうう
どお辭儀ぢやないハ珍覽じまを体なれハ振廻返す連ハ得致
さなカハ酒と一ツ進ませううハ又此方の喝ハ悪い癖で人
様お振廻れて居事ハ強ハ嫌ハ嫌ハ必休めぢや一ツ飲つて
下さりませ喝一進酒買て來らぬう」と言れて否共客の手
前不承無性に女房ハ徳利提て出て行。奴ハ酒も不思議な
類付己ハ酒香すどハ向様やら嬉い事だんべいハ振廻た杯

所の名さへ醒井と云を朝夕酔伏て酒手ハ諸式諸道具迄酒
屋ハ掘出す惣籠昇有名ハ四斗兵衛ハ内一ハハ厥返返の高
枕傍ハ女房ハ賃仕事小遣ハ丈を續ぎ出す座繰車も世渡り
も廻り兼て予見おける。四斗兵衛ハ大欠身中接つて起上
り(四)「耳の端でふうく」と可惜夢を覺し麻た目覺
し「一杯せう一走行て買て來」と奈真演臭い香酸ま作
未香たがるいげちな上戸女房仕事の手を止め(卷)「只今
其徳利を香干て又かいな買お社も最價ハムんせぬ(四)
鏡ハ無汝ハ綿袍打殺して買て來」と無理邪まも男の權
柄(卷)「妾ハ單衣ハ惜まねど其様お香えやんしてハ身の
爲お成まい少ど省愼だか能といな(四)又男の咽絶仕居ハ
な汝食ハ喰いでも酒ハ香すお居れる物ハ小首云すど買
て來ハ行ぬう」頼何卒一杯香してお呉」と猫撫置ハ香
度さの。餘りの事ハ女房ハ憫て詞無りけり。折柄表を憑座
くど通り過るやつこらハ四斗兵衛見るとより飛で出(四)
「く可内殿權平殿ヤ」と呼掛られて立戻り(可)今

どハひやくらハ覺のなき事共ハ酒の筒持せだないうよ、
目ハ和郎ぢやといの(四)何の有様ハ酒一杯振廻れた事ハ
無れどハ餘り喚めハ飲ハぬ故彼様云方便を廻したハ彼奴
お酒買お遣ふをつくり(可)「夫で解たハ已を餅の形でハ
ない酒の形おまえたのだな夫程ハ飲たがるお手前も香助だ
な(四)香助の段ハ名ハ四斗兵衛(可)何ハ四斗兵衛強ハ
名だな(四)是も初ハ一斗兵衛で有たれど段ハ飲上るハ付
ハ二斗兵衛と立身ハ三斗兵衛と出世し退付薦被迄飲上ると
云心で今の名ハ四斗兵衛何と強ハ香助で有ハハ(可)「
強ハ一斗兵衛から四斗兵衛迄の立身其位でハ今の間ハ五
斗兵衛と名を万天ハ上るで有ハハ、果報者め」と咄の内
徳利風羅く女房のお巻(四)「待兼山の時鳥鳴音ハ本尊
掛徳利ハ客人うら」と指し出せば(卷)酒ハ有ても香ハ有ま
ハ奴様への珍馳走ハ湯奴成として上ハ」とお怒ハ勝手ハ
入おける(四)湯奴とハ添けなぬ出來る迄一杯せううハ、
此和郎も近湯うんなら夫うらお初めなされ(可)「添けな

「と茶碗引受とぶくく」一口二口目を飲め(可)、酒ぢやない、水だ(四)何ぢや水ぢや」と茶碗お移し(四)眞お水ぢや、男を遣仕事に掛居たな(巻)何と一ツ上つたり此手でさい、此方の人お街れた振廻返しの伊馳走奴様能上つて下さんした」と云れて月夜お登籠奴(可)酔めお遇したな、湯奴ぢやない水奴だ、あたふの悪」と咄く立歸る。引違ふて来る男平権片手お着籠(男)ヤ一寸物々尋たふふます何所ぞ此邊お坪屋の三右衛門様と云のりふませぬ」と聞て女房(巻)「此邊お其様お人ふんせぬ(男)何所やら此邊ぢやと聞たが夫なら外を尋て見ませう」と行酒樽お目の付四斗兵衛(四)「待えやれ其方其樽着何所へ持て行のぢや(男)今尋る坪屋の三右衛門様(四)其酒を遣のりよし」其坪屋の三右衛門と云へ愛ぢやといの(男)夫なら内方でふりますか(四)愛共く、則ち三右衛門と云へ己ぢや(男)是はまたり左様なら貴様お舞臺でふりますう媒妁お燭屋お兵衛

少しおす追付嫁修繕お越でふります是は少分ながら舞臺へ嫁修のお土産でふります」と樽と肴を指し出せ、女房愕然(巻)「鹿怒な其様事、此方お覺え(四)「是は、すりや是は嫁修の持参か、く、修訂噂な女夫の中お氣を強いでもよい事を敢言の杯盡、後程先手付ふ一杯致さふ」と取出茶碗(巻)「誠相な其酒飲で嫁修とやら少愛へ見えたら如何せうと思ふて(四)如何せうの彼様せうのと高が女房お持や能ぢやない(巻)「妾と云女房の有上(四)酒さへ持て来りや幾人でも女房おする酒戻しはせぬ物ぢや」と茶碗お汲で圓と一飲(巻)「嫁修お最愛へ」と云間表お風重二八の花の振の袖田家お有ぬ分羽織大小の拵へも利方を好む立派の侍(遣)誰が案内頼たし」と音信聲にお着が勃然(巻)門連への嫁修様おた能お出成れた」と陰く女房四斗兵衛へ酒が仲人の俄舞是へく、み打通る並々ならぬ其物体(巻)「お前、兄様(遣)「私のお縁の縁今日お参つた、四斗兵衛殿へ折入て頼度仔細有て嫁と

名付し此お方お鎌倉の大將北條家のお忌女頼家公へ縁邊を取結びし所は若氣とて三浦之助お割なき懸路京鎌倉和陸の種と思ひし事却て破れの端となり時姫の首討て渡せと京都よりの難題時政公も不義の娘親子の縁切たりと鎌倉へも入られずは身一ツのは難儀、此片岡が一心お迫り様々思慮を廻せ、何と云ても過急の妙法先を隠し其上事を計らん爲魂ひを見届けてお預けやす四斗兵衛殿呉々頼み存する」と餘儀なき体お巻が悦び(巻)親兄の赦しも無む我儘な男様お憎いやつ不義者とお手討は違逆も無理ど、思へぬ身の徒ら悔、千萬返らぬ昔其お呵りも無親身のお頼お氣遣ひ遊すなどヤシなけれと氣の毒、酒故心てんくする夫の氣置(四)「やい、二言めふ酒をど男を打込さいまぐれめ魂ひを見込でと有から、如何おも四斗兵衛が命お掛てお匿ひヤンませう(巻)「合点お行ぬ其氣なら宜れ共酒飲えやんすと忽ち替お前の心(四)「お匿ひヤス内、何年でも禁酒く、お匿ひ隠せたら其時夜

賞お四斗樽四五挺、夫迄、香も嗅ぬ氣(巻)「出来さやんしたく、お前さへ其心なら、兄様何時迄成とお匿ひすませう其替お夫の身の上お頼上ます」と夫婦が詞お片岡歡び(遣)妹が縁お連姫を匿ひ呉られふとい、町人乍ら頼母敷心底首尾能致さ、妹諸共鎌倉へ同道致し、振群の知行取付お取持致さん(巻)「そんなら、真人を侍ひおして下さんす、く、概おえやんせ知行取ふするとい(四)「宜く知行取お成たら、際お酒買お行も乗物お乗て遣(巻)「又其様事、夫の出世もお煩様よふお出遊して下さりませ」と追離も夫思ひと知れたり。時姫も顔を上不思議の縁で夫婦の世話お成身、お蟬の有り無りの憂命能ふ」と計ひ跡云さし顔差入る懐中の内や涙の淵ならん。片岡座を立夫婦お向(遣)「兩人お預る事此上の安堵なし必ず人お氣取れぬ様、随分心を付られ(四)「此四斗兵衛が預るから、候と通し、駕籠お乗た様お思てふりませ(遣)「是は、忝けない殊お寄お引返してお迎ひ(四)「浮念お及おぬ

修勝手次第(遣)然(お暇おまづ)と姫も禮義片岡元
來(道)立歸る。跡(夫)婦(氣)も欣(四)「上(強)強(口)能成て来たといふ少(神)酒でも上(ぬ)かい(卷)」、
只今(禁)酒(や)と云て最(う)いの(四)「真(其)禁(酒)を頼(忘)れた程(の)」、また(飲)付(た)酒(飲)す(居)たら(氣)が(盛)て(不)可(堪)ま(い)「己(氣)の(盡)より(お)姫(様)が(ア)嘸(浮)退(屈)ふ(ま)ま(よ)」、
お慰(み)に(酒)の(粕)な(と)買(て)來(て)進(せ)ぬ(かい)(卷)「省(慎)ま(や)ん(せ)何(の)貴(女)へ(其)様(物)不(自)由(も)暫(時)の(中)頼(て)貴(女)の(思)召(す)戀(人)様(み)逢(坂)山(の)之(及)人(よ)尋(て)送(お)出(で)ら(ま)ま(よ)」、
と諫(な)せ(せ)時(姫)も(姫)益(な)き(戀)も(結)ま(れ)て(我)身(計)り(う)片(岡)も(苦)勞(掛)る(も)自(ら)故(夫)婦(の)手(前)取(し)」、
と頭(照)葉(お)置(置)の(袖)も(浸)せる(有)様(も)巻(も)詞(涙)組(暫)し(詰)も(無)り(け)り。
折(柄)來(る)盤(賣)が(上)下(た)め(付)酒(樽)を(肩)お(風)羅(く)足(音)の(中)よ(若)や(と)巻(夕)氣(轉)離(見)谷(め)ても(大)事(の)身(見)苦(し)けれ(と)奥(の)間(へ)と(女)房(お)誘(い)れ(徐)く(立)て(入)給(ふ)。
表(お)盤(屋)夕(長)大(聲)(長)「蕪(籠)昇(の)四(斗)兵(衛)殿(の)愛(で)ん

すか」と直(と)道(入)て(顔)と(顔)(長)「其(方)さん(が)四(斗)兵(衛)殿(の)送(お)逢(た)事(も)又(近)付(でも)内(儀)様(留)主(で)ん(す)か(四)」、
「嗚(い)の内(お)居(ます)す(貴)様(何)所(か)ら(と)さ(つ)た(長)「己(や)盤(賣)の(長)巻(と)云(者)で(ん)す(が)「鹽(商)賣(も)身(の)廻(み)張(込)で(合)事(ち)や(ご)ん(せ)ぬ(は)い(の)夫(で)實(本)の(入)ぬ(蕪)籠(昇)が(仕)度(の)ふ(弟)子(み)成(み)來(や)ん(ま)た(近)付(の)爲(少)分(乍)ら(此)一(樽)酒(お)香(で)下(され)」、
と酒(樽)直(せ)ば(莞(爾)笑(ひ)顔(四)「い(是)や(添)け(な)い(酒)さ(へ)貨(へ)何(所)か(ら)でも(能)と(さ)つ(た)ま(た)が(蕪)籠(昇)の(弟)子(入)上(下)と(ハ)裸(で)茶(の)湯(行)裏(ぢ)や(の)而(て)強(い)氣(の)眼(根)ぢ(や)が(是)も(又)水(ぢ)や(無)う(長)「具(様)ぢ(や)な(い)小(半)酒(や)八(文)酒(飲)付(た)口(よ)少(と)重(ふ)て(飲)懸(か)ら(ふ)並(酒)でも(無)こ(り)や(鎌)倉(山)(四)「何(と)(長)「鎌(倉)山(と)云(太)如(な)名(酒)ぢ(や)程(み)味(合)て(飲)で(貰)ひ(ま)ま(よ)り(四)「飲(ま)ま(よ)如(何)も(し)ても(云)様(少)面(白)い(又)此(四)斗(兵)衛(が)飲(う)ら(ハ)鎌(倉)山(で)ら(ふ)富(士)の(山)で(ら)ふ(が)營(日)本(國)でも(此)茶(碗)に(引)受(て)い(で)と(思)い(一)般(一)飲(一)試(み)ふ(一)杯(致)と」

と指(さ)の(口)から(せ)ぶ(く)お(辭)宜(な)し(下)さ(れ)る」と引(受)く(積)り(飲)(長)「見(事)然(ハ)お(肴)仕(つ)ら(と)と(蕪)籠(解)て(金)作(太)刀(魚)の(作)物(魚)末(乍)ら」と指(さ)せ(せ)ば(四)「是(や)お(肴)が(肉)過(て)我(等)些(陰)惡(い)此(肴)ハ、お(預)け(や)ら(う)ら(長)「お(辭)宜(な)ハ、及(ハ)太(刀)魚(よ)り(ハ)此(給)の(突)先(嘴)呀(た)齒(ふ)し(の)丈(夫)過(れ)四(海)の(軍)帥(や)醉(狂)人(と)見(極)て(の)お(肴)受(て)清(潔)り(切)て(貰)ひ(度)(四)「切(ど)い(何)と(長)時(姫)の(首)も(只)今(圍)ま(は)れた(時)姫(其)首(少)貰(ひ)度(少)も(や)貴(様)得(切)る(ま)い(の) (四)「何(よ)り(必)安(い)事(切)て(や)ろ(く)何(の)己(少)首(ぢ)や(ま)し(人)の(首)の(一)ツ(や)二(ツ)固(なら)目(の前)で」と又(引)受(て)せ(ぶ(く) (長)然(ハ)肴(も) (四)「志(さ)し(ぢ)や(藏)こ(う)い(時)姫(の)首(夫)も(合)點(切)て(遣)」、
と初(の)必(酒)故(打)て(替)た(詞)曲(一)曲(者)と(知)れ(たり)。
始(終)一(間)を(隔)居(る)女(房)走(り)出(巻)「四(斗)兵(衛)殿(兄)様(お)詞(稱)ふ(た)此(方)の(出)世(知)行(取)成(事)も(酒)で(忘)る(性)根(な)し(如)何(お)酒(も)酔(た)迎(お)姫(様)の(首)切(と)ハ(餘)り(な)人(で)な(し)其(所)を(人)酒(の)醉(を)相(手)ふ(せ)ず(と)疾(々)逝(で)貰(ひ)ま

しよ」と色(氣)として(腹)立(女)房(夫)の(酒)も(廻)ら(ぬ)舌(付)(四)「く(蕪)籠(め)知(行)く」と吐(す)少(何)の(五)万(石)や(十)万(石)此(酒)に(替)る(物)か(い)夫(で)姫(の)首(討)て(遣)が(何)と(した)(卷)「す(り)や(何)様(有)ても(お)姫(様)を(切)氣(ぢ)や(の)(四)「切(卷)夫(聞)た(ら)最(愛)の(置)ま(さ)れ(ぬ)愛(が)供(して)死(體)へ(手)渡(し)する」と一(間)へ(証)入(甲)斐(く)數(姫)の(手)を(取)立(出)る(盤)せ(ぬ)縁(り)見(合)す(顔)姫)「微(し)や(懸)じ(や)」、
と立(寄)姫(と)扱(討)に(首)の(前)よ(ろ)落(け)け(り)。「微(ど)お(巻)夕(氣)も(半)乱(盤)賣(突)立(長)「過(れ)四(斗)兵(衛)出(か)され(たり)」、
と云(捨)て(て)駈(り)行(く)跡(お)女(房)少(聲)を(上)巻(扱)も(く)可(憐)や(お)命(を)助(ふ)爲(必)を(幸)い(て)兄(様)を(愛)ま(で)預(お)見(え)た(物)其(時)難(面)預(ら)す(ハ)斯(云)事(の)出(來)ま(い)物(佛)頼(んで)地(獄)の(牛)頭(馬)頭(若)今(も)も(兄)様(が)お(迎)ひ(お)見(え)たら(ハ)妾(や)云(譯)が(な)い(は)い(の)事(發)して(く)」、
と夫(お)取(付)總(付)恨(み)敷(け)ハ(轉)り(と)倒(前)後(も)知(ぬ)高(野)斯(ど)も(知)す(片)岡(が)體(義)の(上)下(折)目(を)正(し)お(迎)ひ(の)衆(物)釣(せ)悠(々)と(口)ふ(イ)み(遣)「家(來)共(云)付(置)し(物)此(家)へ(持)來(し)案(内)せよ」

と詞も連衣服大小白臺お輝く兜の龍頭傍映しと并置。
 片岡徐々内お入(造)願ふ雷の落来る急難事故なく相識し
 故早速極の浮遊ひふ巻上せり退とすする四斗兵衛藤原
 以下されし故助かるまじき姫の命助かりし命の親直お鎌
 倉へ同道致し時政公へお目見契約の通り只今より武士ふ
 取持殿の音物浮受納有て姫諸共浮出立下さらば此上の祝
 ひなし」と懇懇お述べければ女房有ふも有れぬ思兄が脇指
 抜取て自指と見ゆるを片岡押へて(造)「心得ぬ此有様」
 と刀物扱取眼を配り(造)「是時姫君の浮死骸何者か手ふ
 掛し、仕損たり」と齒を噛むる怒りの面色(造)「妹が
 行跡と云扱ハ四斗兵衛めが所爲よな汝下郎め住君の敵一
 歩試し」と切付る心得むつくと起上れば奇つて切込刀の
 稻妻此方の早足ハ飛鳥の駆り勢ひ響ふ龍頭の兜と片手お
 引掴み一間を指て駆込なり(造)「比法者逃る逆逆さうの
 と願ひて駆行向ふ妹(番)「お腹立り理り至極酒故乱る
 心を知り置まふたの妾少科夫より、先へ妾を殺して下



さんせ左様ない中へ奥へ遣ぬ(造)「邪魔ひろくな」と
 引指退駆行踏ふ又取付遣じ。放せ。と響さふ最中表の方お
 大音上江州藤井の住人和田兵衛秀盛浮用意罷坂本の
 城へ浮入城三浦の助義村浮迎ふ伺公せり」と呼る聲ハ以
 前の遠實始りふハ似ぬ勇士の出立急お急たる片岡も様子
 如何と猶躊躇居る女房不思議立向ひ(番)「坂本の城へ勝な
 んどハ何時味方させ何時の契約殊おハ隠す夫の本名和田
 兵衛秀盛とハ(三)「陣平輝信が鷹をたどり市人よ妾を懸
 し隠されても美名の四狗お芳しく宇治の方の仰を受何卒
 きて味方お招き唯の劍を授けんと妾を懸し御柄すれ共元
 來面体見知り某し如何と心を砕く中仙道お不思願
 出合我姓名を印したる手繪を以て試せし手繪和田兵衛な
 らで知し及ハぬ秘代の手の中何本味方お頼まんと思へど
 手番衛なく如何と案じる時時時姫君を懸へれし是幸ハ
 と此家お來り曾討て渡されよと渡せし劍が則ち唯の劍我
 心を推望有しう事故なく受られしハ味方お加る願の割印

此上ハ片時も早く打立給へ侍供せん」と高らかに呼ハつ
 たり片岡聞より猶も急立(片)「京鎌倉と引別るれハ我ハ
 鎌倉時政方京方の奴原一人も生置れず其上眼前姫の仇何
 所迄も」と駆行一間。隔の戸障子踏開ハ内ハ四斗兵衛悠々
 と襦袢お替る肌着の小具足唐纏仕たる陳羽織十主頭の
 小手間當太刀と甲を兩の手ふ床儿お掛る有様ハ實ハ百万
 騎の軍帥と書柄勇々敷見えおけり。和田兵衛兜を座前ふ
 直し(和)如何ハ片岡時姫の身お替り殺されし其娘ハ定て
 貴殿の息女ならん可憐さよ」と悔の詞(造)「ハ、某しが娘
 と知て(和)「敵の氣を見て士卒を遣ふ此和田兵衛況哉一
 人の女童如何程お偽ハれば逆親子の親み上下の人相一目
 みる見違ゆべさう頼家公お縁邊ハ切たれ共不義の科有時
 姫君夫故娘を身代りとし時姫の心の儘三浦之助お添せん
 と心を砕く片岡殿其忠義を感じ入不便乍ら殺害致せば時
 姫と云名の消て今ハ憚る所なしお迎ひの乗物お忍び在座
 時姫君早々是へ」と和田兵衛が詞ハ片岡陳じも成す表の

方乗物出れば時姫君倒つ轉ひつ住の江が死骸も取付總付
(姫)親の許さぬ懸路故兼て亡身と思しふ自ら命代り
て死で給つた住の江嬉しい共忝けな共争闘の有べき
が只恨しい遣酒頭期なる事を圖程もなど知して呉さ
りし知バ暗々此人を殺すまい物無端や」と恨み詫ちの涙
川袖も濡らす計なり(遣)住の江の粉はし其死骸の時
姫君左云汝が我娘ナ合点が参つたり親も勝つた娘が忠
義大死さして下さるな」と目を數瞬く片岡が心を察して
妹ハ三浦之助も打向ひ(巻)時政公の消息女と云ハ添れ
ぬ敵味方兄様の娘も何の障りも味方同士や参つた
と云を打消し(三)味方どの様ハ鎌倉方へ裏返つたる
不忠侍ひ其娘も何の縁組某し心を寄し時姫君首討れよ
と望し敵の縁も引れれば潔白是非時姫を娘とし此三浦へ
送たくハ御引出おの汝が首覺悟せよや」と詰寄れハ(和)
速まられな三浦の助命を捨て名を上るハ誰しも武士の
好む所名を捨て忠義を立る遣酒の頭其體操こそ此兇是く

を將軍宣下の傍實假令頼家軍も打勝四海残らず横領有て
も此兇なき時ハ將軍宣下思も寄す底を計て片岡が鎌倉方
へ裏返り不忠の名を取れし故念なふ兇を奪ひ取某しふ渡
されしハ名を捨て忠義を立る古今の忠臣此兇手ハ入ハ是
より坂本の城へ馳向ひ鎌倉勢も分目の軍假令時政何方勝
あて向ふ共宇治勢田も些を構へ懸る懸る懸る懸る懸る懸る
れ或ハ懸れ千變万化も寄手を惱し大將も舌巻せんハ此和
田兵衛が方寸も有心安りれ方々」と居乍ら驟る軍帥の軍
配(遣)驚き入たる秀盛の明智斯る軍帥味方も有ハ軍の
勝利疑ひなし我ハ有ても益無臣今こそ三浦の望も任せ御
引手進上せん」と云より早く指腹も突立ればハ悲やと
姫妹雖り歎くを押退突退(遣)京方ハ誰々指折の數も
も入し某しが暫時も鎌倉へ裏返つたる其惡名何を以
てり雪ぐべき味方の内も追従表裏の大江の入道某し再
ハ城お歸らハ兼々より鎌倉へ内通したる事共の願れん事
身の大事と如何なる非道謀計を以て味方の心を迷ハさバ

區々なる人心我疑ハ人疑ハ人氣和せざる其時ハ軍の勝
利思ひも寄す其處を思ふて此切腹死後も片岡ハ返り
忠せし不忠の臣と未代名ハ穢す共一心五臟に忘れぬ忠
義何卒名有軍帥を味方させん物と心當途ハ和田兵衛殿
妹が連添と聞しハ幸ハ住所を尋ね我志さしを立ん事此人
ならでと娘を誘ひ存念を立たる某ハ妹悔ひな時姫君も
歎なく身代る娘が志さしを立てたべ不便やお主のお
爲と聞悦び事ハ悦びしハ逆もの事ハ男の子お生れたら戦
場の一大事ハ馬先の用も立て名を上る討死えたら父上
迄お嬉しう女子の身の不がひなさ爺様耐堪て下されと
云た時ハ出来したと譽る事ハ胸お迫り一言一句も出な
んだお親も勝つて先立親ハ後て歩行足此家へ来る道々
の堅牢地神の願ハ麻片岡が踏足が大盤石と答へやせん
重し忠義も替たる娘能死んで呉たな出かした」と鍛ひお
治ひし忠義の體も子故の輔も吹立られ咽涙涙の熱湯の湯
玉飛しる如くなり」妹ハ正躰泣沈み(巻)能々爾ハ兄弟

中只一人の姫も名乗合もする事か無墓別悲や」と
歎けハ共お時姫君(姫)逆も添れぬ敵同士疾から妾が死だ
らハ斯様した愛目ハ見まい物何卒添度ハ未練な心の
迷ひから親子の衆の此最期ハ堪忍して給いのふ思ひ切ふ
と思ふても儘も成ぬ懸路の因果難命死後れ面目ない
恥しい叶ハぬ懸を諦めて此身の果ハ尼法師夫が根ての云
譯ぞや」と身を裏菊の兩袖も保ち兼たる露涙親子の爲の
香花も時時を時時香爐も燦す烟筒者待東大寺の寶物なれ
ハ佛縁も誘引未來の佛果も合す手も又も涙の珠數の玉こ
ハ有難さハ手向娘も我も成佛得股只此上ハ(遣)三浦之助
ハ媒介頼ハ和田兵衛殿(和)其儀ハ些少も氣遣有な」と
兇を取て三浦小向(和)御引手と望し首此兇故命を捨し
片岡なれハ一身五躰ハ兇も残る是を引出ハ姫の事氣強さ
計り武士とハ云ぬハ情も武士の道具」と渡せば取て三
浦之助(三)此上何り辭退せん左ハ云勝利得る迄ハ預け
やすお巻殿家を出る時妻子を忘れ戰場も及んで身を忘る

ハ勇士の常若も運盛頼家公の大事と成ん時は此龍頭の
兜を著し君に代て討死せん名香薫る首取しと云沙汰有ハ
三浦が討死せしと知給へ」と詞へ未だ逢坂や關の清水と
湧返る浪乍らの暇乞離れ難なき初想み絆し見せぬ若武
者を伴引出る軍の首途羨まし氣に延上り見送る手負を助
け抱し共に見送る姫女房戀と無常を見捨行武士の道と
(三重)是非もなき

○坂本城佐々木陣中の場

名ふし近江の景色も今戰場と名古の浦邊の頼家公坂本
小居城を給ひ家々の旗指物比敵旗ふ懸へり霜お耀く弓鉄
炮陣所の篝火天を灼し要害嚴く守り居るは城預り佐々木
四郎左衛門高綱城中限々語りへ寒夜を厭ひぬ夜廻み心
を配つて立歸れハ物見の軍侍勤開次郎は前より畏り(次)某
し只今遠見致せしは皆手ハ比良に陣を取明日敵の大將ハ
は舎兄佐々木三郎兵衛盛綱殿未明に寄來る休と見え數万
の軍兵弓弦をまめし馬小鞍置鉄炮火矢の川看最中は油斷

手を添るの陰陽和合で着初め故實此上ハ作法の通り着
て遣て下さんせ」と夫婦立寄寄きを祝ふて鶴の小手脚當
東方取て打着れハ父ハ上帯腕と袖(簪)通れ武者形鎧の着
形父は頼と生寫し」と母の悦ひ高綱も我子を見上見下
して悦み眼お涙を浮り(高)情なき物ハ武士の身の上主
人のお爲お翌日討死も計られず命ハ義み寄て輕し汝迎も
其通り伯父甥兄弟引別れ骨肉の戦ひなれば敵も味方も晴
勝負去乍ら討死するを忠義と云れまじ千變万化に軍慮
を廻し身を全ふして始終の勝こそ武士の肝要我采配ハ付
隨ハ未練の働ま致すな」と父の詞ハ小四郎も體付して勇
々しげハ勇進みし武者形ハ末頼母懸見えふけり。母ハ悦
ひ軍圓めて扇立ハ(簪)ハ出来まやつた只今の鎧の致
副忘りやるな着初め儀式ハ奥の間で父の盃蓋頂戴まや
(高)成程ハ頼家公もや上初陣の門出を祝ハん篝火來
れ」と打連て一間の中へ入あける。夜も早更て森々と音
ハ湖水の浪成ぬ敵味方白妙の雪ハ映ハ陣羽織武者頭

有な」と述べれば(高)ハ出かしたハ兄盛綱の軍立心
悪し左有んと某しも兼て手當を仕置たり猶又汝諸軍ふ其
目觸知せよ」と追立やり其身ハ軍慮ハ他念なく暫時の隙
も机づき眞草行の堅からぬ愛ハ愛持間の襖物靜かみ押開
き妻の篝火一子小四郎の手を引立出(簪)是ハ未だ休
みも成れず夜晝合戦の工夫只今開ハ明日より矢合せ寄
來る敵ハ兄盛綱様他人よりハ曠の合戦此子も今年十三
あれハ今夜鎧の着初させ父上の供して初陣ハ手柄を
たいと強ての願ハお聞届け遊ハして小四郎の初陣お許し
成れ下されかし」と母の願ハ小四郎も(小)明日ハ父上
の戰場への供を修敷免有」と稚氣ハ思ひ詰たる顔色を
父も點頭(高)道理ハ主君ハ忠義ハ魂ハを凝し我子の年
を確と失念偵ハ高綱が子程有出來すハ成程其方ハ願ハ
よ任せ明日の軍ハ我ハ引添初陣の手柄を見せよ(簪)サ
ア婿や父の得心其方も悦ハや鎧の着初ハ此母が手づか
ら縫仕立た鎧下行丈盃の下染ハ勝色見する紅梅殿し母が

巾目計り出し後先見廻し城門を忍びやりハ打叩ハ兼て
窓らぬ佐々木が下知門番機ハ扉上り透し窺ハ星月夜喚
鐘ちやんと濡けハ追取刀篝火ハ城門近く走り出(簪)注進
の者ハ何者成(門)さんハ供をも連す只一人敵の忍びり
内通ハ何ハもせよ名を名乗れ何と」と尋る聲(盛)
ア、騒し音高し斯云我ハ此城中の主佐々木高綱ハ兄三郎
兵衛盛綱弟ハ顔見たさ密ハ是迄來りし」と案内の趣き取
次ハ篝火不審晴やらす(簪)一家ハ内燈翌日ハ互ハ劍を振
合敵の大將三郎兵衛盛綱殿如何成術計も計れず内ハ得
こそ通をまじ達てと有ハ用捨ハ成すハ何れも防矢の用意
ハ」と云折柄奥の間より急使(使)高綱様の仰せハ兄
盛綱様久々のハ入門を開いてお通し有對面なさんとの涉
事」と聞て猶しも不審乍ら(簪)夫の深い思案こそ有つら
め此上ハ門を開き通りなされとやしませい」と禮義の
詞觸れお小太刀隠して徐々ハ油斷荒木の門の門錠ハ互つ
たハしめく城門を開けハ盛綱のつしハ通る客振ハ出迎

ふ氣配り。互に見合す四目結座するも針の青盤上ずんべりの會釋して(義)「く」珍しい盛綱様久しふお目も懸らねど何方様もお揃ひ遊ばし伊勢勝の伊藤子彦乍ら承まいつて夫を始め妾が悦び(盛)「最夫の相互今日も指折て舞ふれ」弟も別れて今年丁丑十三年其節一子も當歳なりしが定めて成人きたである此方ふも小三郎と云同年の悴見替す計の成人先達ての合戦の國も遣し置たれと此度の母も子も是非同道きて呉と親子の願ひ久々一家の對面せねば餘りく懐じさみ參つた小四郎が成人顔早く見度一目達しておくりやれ」と世も陸敷盛綱の詞の二心も有まいり如何う斯うと胸の煽はる篝火(義)成程貴君の被仰る通り太平の伊代なれば小四郎も伯父伊藤様お引合せ申して何角指指お杯蓋を頂戴致す少願道なれと供ふ成ぬの敵同士どうで翌日の初陣お父伊藤引添出ますれは伊對面の戰場にて悴小四郎が小腕拳矢一筋射掛ませう夫と一家の杯蓋と思召て下さりませ」と否と云さぬ道

理とくし盛綱返す詞は(爲)齋の間の襖押開き(高)四郎左衛門高綱夫へ參つて對面を仕つらふ」と立出る其容軍の立引替て兄弟因の長羽織遙下つて座を直り(高)一別以來伊意得ねど兄弟人おも伊勢勝長々母の伊介抱身お餘つて大腹先達ての益なき詞の論お寄て兄弟の中不和と成國を立退是迄疎遠ふ年月を送りし失禮全く伊免下さるべし」と親兄の禮濃くお手を突疊お平伏お盛綱も居直つて(盛)「音信不通の相互今日来るの久々お對面が致したさ又其外お折入て願度仔細有て推て推參(高)是はく兄弟人改まつたるお詞身分相應な伊用ならお聞ふぢや迄(盛)先以て忝けなし願度お別儀でない今宵密お陣屋を脱出只一人来た仔細お某し今日より心を改め頼家公へ降參お參つた何卒伊前へ取次がきて貴ひ度斯様お云は盛綱卑怯者と思はふが左様でない翌日の合戦の何れが勝とも定らす牛角の合戦旗色懸さふ降參する三郎成ねお情々思は兄弟引合も武士の習ひと云乍ら昔の爲義の義朝の

保元の戦ひ正敷天の道お背けお平治の乱お義朝の長田よ討れ源家を潰永く武道の悪名を遺す何れが討れても父母の魂魄悲み如何計り兄弟が不孝の罪天より高く蒼海より猶深し夫を思へ何と及合されよ今日只今心付取を拾兜を振降參お來た此盛綱骨肉同胞の佳の頼家公へ伊執成頼み入弟」と手を付頭を下おける。物をも云ず高綱すんと立て入んとす(盛)是が弟開届ておくりやるる返答如何ふ」と引止れば立たる重藤退取て隆く發矢と批打。何事と驚く妻本篤院と(盛)先待た高綱現在の兄を打擲するの何故の立腹」と云せも立す八打と睨み(高)兄と推參慮外千万凡弓取の操のな善おもせよ惡おもせよ一度頼れたる詞を變せず危きを見て命を捨二君お仕へぬを道とする事お打童迄知處佐々木高綱が頭を踏へし三郎兵衛盛綱一旦鎌倉お味方仕乍ら今更無色の惡さを感して生類下て降參とひよつと腰抜の犬侍ひ兄弟の縁切た夫共伊勢高綱お兄ならお其腐た生根を改め彌敵味方

と成て戰場おて四郎左衛門高綱が首取て見せうとお云やれ夫と賊の兄弟人有難く存奉つらん何時の間お其様な憶病神の付たるるお情なや口惜や」と或い願し或い敵の怒の眼お波落く涙(盛)「道理至極盛綱も返す詞のなけれ共伊邊の一圖お忠計り孝の道お心付す頃日我陣中へ暮來る母御妙伊邊が爲も親成すや何方が討たる、共お年寄れし母人の伊敷きを思ひやり生る共死る共兄弟一所おせん爲も孝行の降參聞分て是非お取次弟妹も執成を頼むく」の眞實も夫の心計り兼何と挨拶口籠る(高)「恥を取共思ぬ人畜顔見るも穢しい城内お暫時も叶ぬ早出て行やれ」と手を取て引出す義心の賊お咎めん方も荒氣の高綱(高)素他人の卑怯者はい捲つて門を固め上無益の事お陣立の支度延引隙惜や篝火來れ」と立て入兄へ情し計略の裏かく矢先返し矢も思案取し捕出の馬場先親ひ宿たる侍ひの古郡新左衛門(新)盛綱殿が城内の首尾何と(盛)「やもう高綱が義心の鉄石某しも北條殿

のお頼み何卒高綱を鎌倉へ味方させんと餘所乍ら心底を
探り見れ共如何なく二君お仕る所存のない事耽と錠が
下ました連もお手よ入ぬ高綱此上暫時も猶豫ならず短兵
急み取圍で城を踏すが肝要く早明方も程近し大將へ涉
注進(新)實も尤も卒ごされ」と逸足出して行後高綱徐
くゆるぎ出(高)時政お頼まれて我を鎌倉の味方付んと
あさどき兄が偽り表裏計略を仕損じたれ、時移さず宵來
ちんや、陣所の諸軍共鐵炮火矢の用意せよ」と撥追取て
陣太鼓乱調み打立れば東の山も茜さす白旗赤旗鯨波早寄
來る(三重)朝嵐待設けたる坂本勢皆槍の矢間より敵を
寄じと指詰引詰射掛矢先へ雨霰射屈られて寄手の軍兵攻
倦んで見えたる所お城の大木戸押開き聲花うなる若武
者一騎駒ふ鞭を打立く手綱抱縁乗出し(小)ア憶したる
鎌倉勢我討取て手柄せよ」と鞍笠み突立上り(小)我こそ
佐々木四郎左衛門高綱が嫡子小四郎高重今日が初陣」と
名乗掛く東西へ駆進れば。能敵なり討止んと數多の軍

兵波路くと追取巻槍より母鎌火我子の初陣勝負如何
と見れば平場の取ひ多勢の中お取込られ父も學ひし手
練の太刀打前後左右より突掛る琴柱熊手鋼又切拂ひ真向
立破手を碎き切立られて軍兵共立足もなく逃散へ槍より
見る母親へ嬉しさ足も千鳥泣落邊の方より年輩恰好同じ
毛の駒お跨り乗出し(清)目覺き小四郎殿の働き驚き入る
某し、其方の叔父佐々木三郎兵衛盛綱が一子小三郎盛清
互お初陣從弟同士の曠勝負」と兩人馬を駆寄く太刀拔
放し片手綱互お覺の大極不極の太刀捌手を盡してを戦へ
右出の山の尾先より小三郎が父佐々木の盛綱倅が初陣
勝負如何おと戦ひ見下す遠目鏡。母へ槍も目も放さず
膽を冷する子と子の勝負そこを付込小三郎と傍なる人お
云如く父が追急な篝火へ夫小四郎打太刀が鈍つて見える
其所をくと力む爺親。追急る母互お勝負も付されば集
組ん尤も馬を乗寄むつと組曳手くと揉合しが鐵蹴放
し細乍ら兩馬が問お握と路上おなり下おなり轉り倒ひ打

たりしが小三郎運や強かりけん小四郎を取て引伏し帯解
て高小手折重つて大音上(清)佐々木の小四郎高重を初
陣の手始め生捕たり」と呼ひれば寄手へ柄と響る聲槍の
上に篝火が呀と泣聲凱歌へ谷へ響て(三重)懸がしき
○盛綱陣屋の境
其源へ近江路の比叡山下し隔られ便壘田の厩絶て武士
の義へ石山や月の弓張矢叫の矢橋の歸帆陣幕も閃く比良
の陣館小三郎が初陣の手柄初めと父の悦び妻の早瀬老母
の微妙軍の安否聞進へ心免さぬ持刀婢侍共も鉢巻締進し
告る高名噂さ(婢)目出度く和子様が今日の手柄の一番
帳同じ初陣同じ年の小四郎を生捕給ふへ大の男を仕留た
より遙の名譽」と口々傍から早瀬が嬉しさ(早)アお聞成
れたりはんを孫の小三郎是からハ猶婆様の姑息と思ひ遣
る、去乍ら飄な事ハ其手柄の相手タ他人成バ宜れと矢張
お前の孫の小四郎嬉しいと悲しいと片身替のお心を思ひ
遣て」と云を打消(微)嫁女、一婆への充言り尤も孫の名

の有せ不所存な倅佐々木高綱音信不通の中お出来た小四
郎どやら終り顔見た事もなしし不便お思へバ連彼様
敵味方と別れた上我も源藏義秀と云弓取を夫ふ持盛綱を
産だ母涙掛て能物り其様事云出しても下さるな、兵衛盛
綱孫の小三郎未歸館召れぬ(婢)イお二人乍らお具足を
お上下お召替られ道より直お石山の浮陣所へ涉出仕遊し
たとの注進定めて強彦義美」と囁き渡る程もなく立歸る
佐々木兵衛小三郎盛清諸人の尊敵身の面目上下衣服も華
美お自然と威を持其後お無残やな小四郎ハ高手お締る綱
め繩雜兵お取巻れ翼叶はぬまよげ鳥の顔見初めの孫共
云お云れず顔色の別れし我子高綱お似たと思へバ不便
を嫁の手前と紛らせお胸つばらまふ容形見せいと思へ
目お掛る血筋の因果を詮方なき兵衛盛綱髓んで(盛)倅小
三郎初陣の手始め是成繩付生捕し事誰々よりも目指大敵
佐々木四郎左衛門が倅れ擒とせしハ味方の強み拔群の高
名と時政時政感斜成す浮悦ひの杯盞と下され手自ら感状を

下し給ひる伊前ふ並居る諸大名凡子を持程の人羨まぬ者もなく子息の武勇ふ類似爲其所へも杯盞愛へも頂戴と持離さるゝ親の面目夫故退出も遅なる首尾残る方も無お悦び下され」と語る中より早瀬が浮々(早)何と浮見じましたり可愛さふ軍の供したがる物を足手纏ぢや留まじ居て呵付て鎌倉へ遣てお出成れたれど今度の軍の外れから生てゝ居ぬと強請ふ強請れ仕様事なし軍と婆様三人連後追て来た時ふも散々に呵られたが今日の手柄と見た時の能運て来たとき妾が自慢出来やつたゝ産た母迄俄お肩が怒て来た(婢)和子様お手柄ゝ」と褒獎たる姦しと微妙も供ふ(微)出来した」と勇んで見ても何所やらお濟ぬ胸の沙埋分乘るふと道理なれ小三郎手を支(清)別て君の傍にゐる四人の小四郎首討事必ず無用何時迄も助け置こと味方の計畧緋め其儘めて随分太切お仕つれとの傍事なり、小四郎殿其方ど、従弟同士初陣の軍お仕負無無念ふらふ」と云れて小四郎高重些此方お入用な

ての敵訓勝も負るも軍の習ひ萬一の時お逃るの侍ひの恥辱ぢやげな生捕れども恥ど、思ひぬ早首切て下され」と目を遷いたる立派さの誠お父が子なりけり。物見の侍ひ罷出(侍)和田兵衛秀盛と名乗盛綱公お見参致さんと供廻り儘か一兩人おて通りい」と訴ふれ(盛)ハ、心得ぬ敵方の侍以大将輕々取來るゝ一物、四人奥お取逃すな皆退け」と追立やり懸す座席取片付衣紋繕ひ出迎ふ甲冑の姿引替て長上下も踏きたぎ伊達持への大小も値無骨の荒暮男目禮式禮態々として上座お勵許押直り(和)扱々此度の合戦佐々木三浦斯やす和田兵衛火水の勝負を決せんと牙を噛で相待所お鎌倉の悠長武士一日寄て、二日見合せ睨み合て日を送る中此方の太息退屈夫故今日の具足も取置太平の姿坂本の城より使者お参つた(盛)ハ、是ハ、名おし負和田兵衛能々太切の儀なればこそお使者の趣を逐一お仰聞られ」と有りければ(和)ハ、別儀でござらぬ今朝高綱捕めて其元の手へ生捕れし小四郎高重些此方お入用な

れ、只今お返し下されとの使なり」と事もなげお述べければ(盛)ハ、是ハ存じの外の仕事何や一人の盡づれば侍ひ大将の自身馬を向られし珍説、那小悴一人お無れば合戦も得なされぬ何故お左程の懸望事可笑ふ存る」と冷笑へ(和)實お尤ども併し此方お不審成り其童の小四郎を貴殿の子息お生捕しと一城をも乗取し如く悦び勇み鎌倉方の勝軍の基なりと旅を叩き勝開作つて引れしハ是如何お左程鎌倉方お懸望せらるゝ小四郎故此方おも惜く存じ是非所望お参つたり其代りふ、少分乍ら此和田兵衛が聲首進上すお望なら、手柄次第お随分取て浮見成れ」ともつと座たる不敵の顔色盛綱お笑(盛)扱、扱、第ながら高綱ハ大功の勇士と思ひしお悴お迷ふ未練の性根其所を察して傍輩の好み命を救ふ情のお使者那式の小兒如何様共とすたけれと生捕の帳お記した上、時政公より預りの囚人盛綱私しお渡されすなら、踏込奪取て歸られ、其座ハ一寸お立せじ」と反打て詰掛れば(和)ハ、お

急なされぬ貴殿と拙者只今爰で指違へての敵味方お能大将二人を失ひ何方も兩損よし、邊の儘お成ぬ四人此上ハ石山の陣お参り時政殿お直談して自他共所望致して歸らん盛綱去」と立上り廣庭お下立(盛)ハ、ろりや兎も角も勝手次第然有ハ石山へ参案内おさせんヤ、誰う有」と詞の下小具足固めし盛の力者波落ゝと取巻たり(和)ハ、仰山案内者敵の陣所へのふゝと一人参る和田兵衛不知案内の無骨者万事宜し(盛)氣遣ひ有なッ、必ず大将の傍座近くお引合せやなら、大事の珍客随分酒を合点り(和)ハ、酒酒どの添けない我等別して大好物浮馳走なら、湖海も替干てお目お懸ふお肴の飛道具鎗長刀の申看何本なり共賞、斷致す盛綱殿お去(盛)和田殿浮苦(和)案内太儀」と長袴虎を放して遣勇氣火焔の中へ行太膽心の具足鉄石の石山指て出て行。盛綱ハ、只忙然と軍慮を帷幕の打傾ふき思案の扇からりと捨(盛)母人夫、小座るすか」と音信懸ふ立出る陣屋の隈々後先見廻し母の膝

ふ摺寄て(盛)親の役目を子に譲るゝ順なれ共、老跡の母人ふ、修苦勞を頼りさね、ハ叶ハぬ事、さね先から心得たど有修苦勞承まはり度」と事有げなる願ひの品聞ねと、偵佐々木の後室打點頭(微)親子の中、改ためて頼と有ハ能々の事ならめ仔細ハ知ねせ心得ました(盛)ハ、早速の修承知悉けなし、頼の仔細と、ハ最前の四人拙者、ハ為ハハ、甥母人の為ハ、孫の小四郎を今宵の中、母のお手ハ掛られ、て」とも敢す(微)ハ、盛綱最前我君よりの仰せ渡され、必ず小四郎ふ過らさすな殺すなどの修承ならすや(盛)ハ、其殺すなどの修承故、猶以て殺さふや成ぬ弁舌を以て、人を懐る北條殿小四郎を殺すなどの定意ハ、生憎て人質とし、子を餌、小飼て、佐々木四郎左衛門高綱を味方ハ付けん謀計、餓み掛て、餌はれたり中々心を變すべし、弟高綱ハ思ハね共如何なる大丈夫も我子の愛ハ迷ふ習ひ、方ハ一此謀計、ハ陥つて降参杯の心付ハ子故ハ不忠の名を流さん事、残念至極よし、然ハなく共小四郎ハ機と成て、息有中ハ恩愛と云

大敵ハ高綱ハ弓勢も弱り、刃金も自然と鈍る道理、迷ハの種、此小四郎一時も早く殺して仕舞ハ、弟ハ義心猶々、鉄石是ぞ兄弟、弓矢の情けト有て、我手ハ掛る時ハ、主君北條の命ハ背ク、稚心ハ此理を辨へ、自身ハ切腹するならハ、我ハ油断の誤まり計り、兄ハ義も立弟ハ忠も立、双方全き此役目ハ、修苦勞乍ら、母人密ハ小四郎ハ腹切せて下され、か、現在の甥、ハ命ヲ宥めて助るこそ情共云、べけれ殺すを却て情ハ、情なの武士の有様や如何なれハ、兄弟敵味方と引別れ、今朝の矢合ハ敵ハ甥なり、味方ハ我子、肉身と肉身の劍を合す、血汐の浦修羅の巷の攻太鼓胸ハ、盤石答ゆる憂ハ、弓馬の家ハ生れし不肖、開分て給母人」と事を分たる物語り、母ハ手を拍(微)道理ハ、兄の其方も弟の高綱も我子ハ依怙ハなければ、共隔て居る程不便も勝り有様ハ、其方ハ心置て居ました、ハ弟ハ不忠の悪名を付さすまいと、左程迄心ろ遣ハの深切、ハ忝げないや、嬉しいや、世の喩ハ小の虫を殺して大功を立る事、眞實眞身ハ子よりも可愛孫なれ共、思ハ切て切

腹させう(盛)ハ、お出かし成れた健氣者とハ見ゆれ共、稚小四郎若小腕ハ切損なハ、母人宜し、ハ修介、銷早短日の暮近ハ、佐々木兄弟ハ苗字を穢する名を上る、二ツの境ハ涙ばし掛給ふな(微)氣遣ハ召んな後れハせぬ(盛)必ず氣強ハ遊ハせ」と渡す一腰受取腰の腰弓ハ、詞番ハて別れ入。峯吹通す木枯ハ、早園城寺の鐘諸共、誘引れ來る白羽の矢、紅葉の茂みハ射込しハ、主を誰共人目、堰陣笠目深ハ、篝火ハ男出立の半弓ハ、やはか仇ハ、歸らじと陣屋間近ハ、運寄(簀)和田殿の供納ハ、紛れ込込愛送ハ、忍入たれと用心、堅ハ陣屋の木戸口心を通はす、矢多の謎小四郎ハ目ハ掛れ、か、祝ハ祝ハ、初陣ハ不祥ハ、細目の腕外の手でも有事ハ、從弟同士の小三郎憎てらし、手拵顔柳を縛らせ、伯父の身ハ夫ハ本意ハ、恨しい何様して居る、只一目見度、逢度ハ問の戸ハ、我身ハをいしと、楯板も通すハ、涙の矢數なり、渡てや、奥ハ聲高く(早)侍ハ中ハ、夜廻り怠り、すなれな」と女の聲ハ、敵の中胸驚うれ、篝火ハ指足乍ら、忍行障子、堀と目早の早瀬紅葉の

矢多、抜取て、熟々、味め(早)初こそハ、羽響もなき、忍の矢、女薬と、推量ハ、違ハ、手跡、狀の文、体ハ、非ハ、名ハ、し、負ハ、邊、坂、山の、玄、及、人ハ、小、知、れ、て、來、よ、し、も、が、な、と、古、歌、を、書、し、ハ、ハ、手ハ見、知、ね、と、相、嫁、の、篝、火、因、れ、の、小、四、郎、ハ、此、陣、屋、を、脱、出、て、入、知、す、來、る、よ、し、も、が、な、愛、ハ、所、も、近、江、路、や、世、ハ、逢、坂、の、關、の、戸、を、明、て、逢、ん、と、知、せ、の、謎、ハ、侍、ハ、の、母、の、様、ハ、も、無、未、練、ハ、卑、劣、ハ、軍、ハ、立、ハ、討、死、ハ、覺、悟、の、前、と、立、派、ハ、小、四、郎、ハ、惡、氣、を、付、若、取、逃、し、や、な、と、し、た、ら、其、不、調、法、ハ、誰、ハ、懸、ハ、一、家、の、佳、み、ハ、生、捕、て、も、命、ハ、別、條、な、い、様、子、知、せ、て、安、堵、さ、す、程、ハ、必、ず、此、邊、ハ、周、章、て、親、子、一、所、の、細、目、を、受、夫、の、名、迄、穢、ま、や、ん、な」と、恨、の、裏、の、反、古、ハ、打、返、し、た、る、返、事、ハ、古、歌、ハ、矢、立、の、硯、羅、ハ、と、書、認、め、て、括、付、内、ハ、も、人、目、重、藤、の、弓、打、番、ハ、陣、外、の、小、松、ハ、ひ、や、う、と、手、答、へ、と、共、ハ、立、切、障、子、の、内、ハ、稚、心、ハ、油、斷、せ、ぬ、細、付、乍、ら、小、四、郎、ハ、密、ハ、一、間、を、忍、出、(小)今、伯、母、様、の、讀、ま、や、つ、た、矢、多、の、手、ハ、母、様、愛、を、抜、て、戻、れ、ど、の、知、せ、ハ、聞、て、も、敵、の、中、見、答、ら、れ、て、ハ、恥、の、恥、と、ハ、云、母、様、何、所、に、ハ、る、死、共、一、寸、顔、見、た、や

と徐々と潜蹤も危き毒蛇の陣の口。咄嗟後より窺ふ微妙
 (微)小四郎待や」と聲も愕然(小)、「何所へも往ハ致し
 ませぬお敵されて」と計りてて戰慄震ふ有様を熟々見れ
 ば見るふ付同じ佐々木の血筋でも扱も果報の拙い子や囚
 人の身と成たれば子心も氣後して身裏洞き顔形今宵
 限の命と云ねと虫々知すうと思へば不覺先立涙胸を押し
 下熱下し(微)「孫よ爰へ来や」其方の邊ぢやないの器量
 骨折崩ふた子小痛々敷此繩目解て其方よ此婆が云聞す事
 有」と立密解く血筋の繩。子故引れ篝火又又戻る陣屋
 の前矢々の返事ハ嫂の早瀬の手跡。行も歸るも別れて
 ハ知も知ぬも逢坂の關との時節を待との事如何もと見
 遣戸の透間。微妙ハ孫の手を引て一間の障子押開き(微)
 「小四郎高綱を別れてから十三年の年月孫有と聞た計
 懐し逢度ハ膝下で育た小三郎より顔見ぬ其方の不便さ
 ハ百倍殊更長の浪人の貧い中育られ武器馬具迄も無不
 自由ハ口惜ふ暮しつらんと思ひ遣程片時も忘るハ隙ハ無

れ共思ふも任せぬ敵味方此上下の婆が其方へ引出物着て
 給やいの」と指出せば何心なく押戴き取上て不審顔(小)
 かし嬰機此上下のいなせ紋がムりませぬ九寸五分が添て
 有とハ高名手柄せよと有首撞刀でも有まいヨ、私ハ腹切
 との死装束でムますな」と悟る伶俐ハ驚く篝火微妙ハ岸
 波と泣倒れ暫時詞も無りし(微)「偵ハ親の子程有人ハ
 勝て其機ハ聞分能程助たさハ胸一杯も逼れ共殺さよや如
 何も成ぬと云ハ爺親の高綱が武勇智謀ハ勝たが其方の身
 の仇敵助けよと有北條殿ハ子を入質ハ高綱を降参とする
 謀計夫迄ハ殺しもせず況て助て歸もせず何時迄も陣中ハ
 捕へて置との生命生て居程高綱が武勇の妨げ愛の道理を
 聞分て潔よハ腹切て給ニ見ハ見程目付なら鼻筋なら眉ハ
 一ツの痣迄爺親ハ此似様智恵才覺迄途ハぬ物生長も見す
 無殘」と替の花を散す」と老の諄言涙の眼。波て外
 面ハ聞嫁の何ば道理ハ道理でも餘り氣強いお儀様お子の
 殺ぬ」と延上れ共葦垣の隔る中を是非もなき。母の心

の通じてや小四郎大人しく手を支へ(小)私ハ命一ツで父
 様や伯父様の手柄ハ成事なら何の惜ハ致ませぬ尤も腹の
 切様も稽古して置たれば切損ひもせまいけれど私ハ一ツ
 の願昨日軍の初陣ハ直ハ敵ハ生捕れ此儘死るハ弓矢神の
 冥加も盡たかど何程悲ハ口惜ハ何卒最一度お歸成れ父
 様母様ハ只一目逢た上切て雑兵の首一ツ取て立派ハ死で
 見ませう此お願を(微)「是南賢ハ様でも値ハ子供預りの
 囚人敵ハ歸て盛綱ハ武士ハ立物ハ父や母ハ逢される程な
 れハ此愛目ハ無はいのどハ云物の逢度ハ道理ぢやないの
 尤もぢや世ハ世の時なら二人の孫有と左ハ月花と並て置
 て老の樂み此上も有まいハ生捕も孫捕れるも孫小三郎が
 手柄きたと扇立る真中ハ縛られて引出れし顔見た時の婆
 が胸ハ張裂機ハ有しぢや逆も甲斐ない其方の運最期が未
 練ハ有た杯と口の端ハ掛られてハ親高綱ハ弓矢の名折尋
 常ハ死で給ハ介錯ハ此婆可愛孫を先立て何時迄因果の恥
 晒さふ婆も直ハ自害して三途の川を手を引て渡はいの

と抱締泣々飢差付れハ只兩親ハ逢迄ハ救して下され婆様
 と未練も親子の恩愛ハ道理と專目も周章孫も周章逢有ハ
 逃んど見やる木戸口の。爰ハ母の呼子鳥(小)「母様ハ
 と飛立計り駈出す孫を引止て急立老母の聲荒らう(微)「
 未練者卑怯者扱ハ母親ハ内通して爰を脱て出る心ぢやな
 夫なれハ猶助られぬ望の通り親も一目逢した上ハハハ
 切腹但し婆が手ハ掛ふ(小)「夫ハ(微)「ハハハ何と」と
 威しハ振て振上る飢の下ハ手を合せ(小)「母様の聲聞てか
 ら一倍命ハ惜く成た何卒助てお情ぢや堪忍して下されま
 せハハハ」と逃廻り後ハ孫ハ猶氣後れ(微)「ハハハ最前の健
 氣ハ覺悟忘れしハ逆も叶ハぬ期ハ成て憶病者の名を取カ
 や伯父ハ見ぬ先自害して立派な最期ハ譽られて奥婆ハ方
 くら手を合せ頼む」と云と逃惑ふ。外ハハハ酷や難面と恨
 も三方三惡道前生の敵同士ハ可憐可愛の孫や子ハ生て愛
 目を見するうと老母ハ親身の血の涙時雨の中の枯紅葉露
 より先ハ散ぬらん。折柄堀と山風の遙ハ陣鐘攻太鼓事と

そ有と早速の早瀬長刀抱込走出木戸口開けハ駆入る輝火
 (早)待た〜高綱のおうもじこりや何處へ(兼)知た事我
 子の小四郎取返す(早)成ぬ〜相嫁の初見參長刀の乗た
 い々(兼)「推參な」とさしみ合ふ真中ハ三郎兵衛小四郎
 小脇ハ引抱(盛)石山の傍陣所ハ有と覺るぞ〜小
 三郎ハ何處ハ在(清)「則ち只今傍加勢」と用意の小具足
 兜の緒締る間遅しと駆出す。引違へて知せの軍卒馳參じ
 (卒)時政公の計畧の如く佐々木四郎左衛門高綱我子を取
 れし憤ぼり今宵自身ハ馬を出し手勢漸く二千餘騎鎌倉の
 惣大將時政公ハ直見參仕つらんと死物狂ハの首有様鬼神
 の如く見えハ併味方ハ兼ての用意大將の陣ハ數方の發固
 盛綱公ハ氣遣ひなく擒の悴を守護有へ〜どの傍事なり
 猶追々ハ傍注進「と捨てて驅り行。三郎兵衛大息繼(盛)
 ハ、南無三寶仕損たり流石澤ハ弟高綱子故の闇ハ心暗
 み謀計に陥つたるハ魔利支天なれハ逆數万騎の其中ハ一
 騎掛の死軍討死せん事眼前たり此上ハ親の傍慈悲佛間で

傍回向成れりし盛綱母人エ、力なき武運の末殘念さよ」と
 討りみて眼を閉て奥ハ入。輝火猶も氣ハ坐我子も氣遣ハ
 夫も如何千々ハ碎る軍の破れぬ〜おうと隣門ハ敵ハ
 味方ハ二人の妻。胸の陣鎧足も空二度の注進勇の大音
 (卒)お悦ハハ軍ハ十分味方の勝利大軍ハ取圍れ集り勢
 の高綱方途を失ふて逃走るを或ハ搔首或ハ射取れ殘る兵
 士散々ハ追卷り諸葛孔明と呼ばれたる四郎左衛門高綱を様
 谷十郎ハ討留てハ」と聞より妻ハ「發と心散亂然立輝火
 夫の首ハ渡されじと行を遣じと止むる早瀬。大將軍時政
 公ハ成さふと呼る聲ハ發と早瀬ハ大將の傍けと走
 入。龍の雲ハ沖るガ如く一陽の春を待平の時政近習の武
 士古郡新左衛門佐々木小三郎盛清傍供ハ扈從してお召替
 の鎧櫃傍座の次ハ飾せて寛然と入給へハ三郎兵衛母微妙
 敬ハ請じ奉つる竹の下の孫ハ邊敷罷り出(兼)最前和田
 兵衛秀盛傍陣所ハ參りし所日頃好める酒を強て醉臥せ居
 間の四方ハ金網を掛たれハ籠の鳥同然と思ハの外の剛敵

隠し火矢を以て屋根を打抜傍座の間の白旗を奪ハ取立退
 てハ」と言上すれハ時政公(時)ハ、敵の軍中ハ鎧も着せ
 す只一人踏込程の不敵者汝等ガ手ハ合へさう第一の大敵
 佐々木高綱を討取たれハ腹心の害ハ拂ふたり去乍ら此佐
 々木古ハの將門ハ習ハ一人ならぬ二人三人の影武者有て
 何れと是と見分難し賊の佐々木ハ腹首ハ弟ガ首ハも見
 損すまじ兄盛綱實檢せよ」と仰の下ハ新左衛門首桶傍前
 ハ直し置。三郎兵衛承まはり大將に一禮(盛)無殘の弟
 ガ死首ハ是非もなき對面や」と香込涙。後より父の死顔拜
 まんと親ガム小四郎盛綱ガ引明る首桶の二目共見も分す
 (小)父様嘸口惜りら私も跡から追付」と氷の刃雪の肌
 腹ハ一發突立る(盛)「母人お止なされ何故の切腹仔細を
 云様子ハ如何」と人々狼狽介抱ハ小四郎屹度目を見開き
 (小)何故死とハ伯父様共覺ぬ卑怯未練も父様ハ逢度父
 を先立何ま〜と生耻晒さん親子一所ハ討死去て武士
 の自誓の手本を見せる」とさり〜と引廻す其手ハ廻り

母微妙(微)ハ其立派な心を知す叱た婆ハ面目ない堪忍て
 給」と右左目を數瞬ハ三郎兵衛(時)猶縁ハ如何ハ早實檢
 何と〜と傍意ハ疵口拭ハ耳際迄驚と改ため古實と
 守り謹しんで兩手ハ捧げ(盛)矢疵ハ面臍損じたれども弟
 佐々木高綱ハ首相違傍座なくハ」と傍前ハ直し押下れハ
 (時)ハ、骨肉の兄ハ實檢と云首ハ向つて小四郎ハ恩愛の
 涙切腹の有様賊の首の證據明白思へハ昨日ハ此首ハ後を
 見せし時政ガ今手の下ハ誅罰する武運の強ハ心地よや
 嬉しやな今と云今時政ガ初めて枕を安く寐るハ盛綱ハ働
 き我替替の鎧一領當座の褒美ハ殘し置小三郎其外ハ陣
 中ハ勝軍の恩賞せん皆方歳を唱へよ」と悦喜の粧ハ傍
 りを拂ハ本陣指て歸陣有。盛綱邊りを驚と見廻し(盛)佐
 々木高綱ハ妻兼火計略の腹首仕懸せられたハ小四郎ハ最期
 の暇ハ敵す是へ」と一言を聞問遅しと轉ハ出我子ハハし
 と抱付呀と泣より外を無。涙乍ら母微妙腹首と知て大將
 ハ渡した其方ハ京方味方する心底ハ(盛)ハいつつうな心ハ

變せぬと高綱夫婦が是程迄仕込だ計畧父が爲ふ命を捨る
幼少の小四郎が餘り神妙健氣さに不忠と知て大將を欺き
し弟への寸志渠が心を察する高綱生て有中の鎌倉
方お油断せず一旦討死せしと偽つて山奥にも姿を隠し不
意を討んず謀計然れ共底深き北條殿一應の身替へ中々喰
ぬ大將其所を計つて一子小四郎を盲く此方へ生捕せ
しが術の根組最前の首領檢腹首を見て父上よと誠しやう
の愁歎の有様も大地も見抜取政の眼力を晦ませし敵も
敵たり覺えも覺え親子才智見す腹首とい思へ共
斯程思ひ込だ小四郎何と大死させられぬ主人を欺く
不調法で腹一ツと極めた覺悟も負を子に教られ淺
瀬を渡る此佐々木朝が忠義も比て伯父が此腹百千切て
も掛合舞の最期の大功其方が命へ京鎌倉の運定出来いた
な出来した」と手負の顔を打守悲歎涙も暮ければ
火事揺蕩て子を養られる親の身の悦ぶの常なれと生て高
名手柄して今の仰に預らば何程嬉しうる可に年相應より

利發な生れ付た此子が因果如何に武士の習ぢや迎斯く
して自害せいと敵る親の胸欲さ可愛や初陣の初めうら死
み行事合点して己や侍ひの子ぢや依て討死するの嬉し
けれど死たら父様や母様もついで逢事か成まいりど夫計り
がと云さして泣顔見せず勇んで行し其立派さ天晴弓矢打
物迄誰に劣らぬ物覺え腹切事迄是程も器用も無へ何事か
喃小四郎く」と手負の耳も口指寄此深手ぢや物耳も
遠なる目も見えまい今伯父様の被仰つた事聞取やつたり
其方の命捨たので高綱殿の忠義が立と褒美のお詞夫を未
來の引導迷はずと佛に成て給」と云詰すれ嬉しけふ
(小)夫様私が死るので父様の軍が勝み成りよ忝けない婆
様何所も私や縛れても卑怯者ぢや無へ夫で死でも
本望ぢや伯父様伯母様婆様も母様もも逢て死るの嬉し
いが只一ツ悲しいの父様く」と跡の得云す舌硬固次
第く弱り果惜や孝の初花も無常の風も散て行(微)こ
喃小四郎孫やい臨終の際父親を尋て死だ子の心思ひ遣

て只一目なせ顔見せよ来て呉ぬ千騎万騎の大將も成べ
ま物を梅檀の二葉で枯せし胸燃の神も佛も無世か」と欺
く微妙の慶あり涙の早瀬篝火も消る計りの思ひなり。三
郎兵衛泣目を拂ひ(盛)「歎きみ紛れ後たり實檢を仕損じ
たる鎌倉への中野母人去べ」と指添み手を掛れば(和)「
盛綱和田兵衛秀盛是も有敵を見掛て自害とい憶した
る」と盛掛られ(盛)「幸ひの好敵歸らば其儘歸さんお
運盡た秀盛逃しはせ」と突立(和)「和田兵衛が習
ひ得し南蠻流の懐る鉄炮受て見よ」と嘯と打狙ひの外
鎧櫃内も忍し椽谷十郎太腹射抜のたうつたり(和)見よや
盛綱底の底迄疑ひ深き北條の隠目附汝が手掛されば不
忠も有や渠めが不運今又邊邊自害せよ鎌倉への義の立べ
さか佐々木が首の腰者なりと忽ち露顯し是迄も碎し心の
水の泡時を待て佐々木高綱誠の愛に切て出る其時お潔
よく切腹せよ忠も立義も全し腹の切腹早い(盛)「
買ひ戻つたり我命暫く生るの弟へ是も情の一ツみ

甥への寸志追善供養野邊送り万事も一家の内證諸事何事
も此座限表へ京方鎌倉方右大臣實朝の御座の白旗奪ひ取
し軍の吉左右重ねて再會止て見ぬか」と出て行(盛)「
盛綱が陣中お味方の武士を討たる曲者」返せ戻せの弓
矢の規式因り嫂女小姑女孫よ甥子の亡骸も憂事三井の暮
の鐘消行子より親心我唐崎の夜の雨父に「一目粟津の
嵐」木の葉の紅葉掃寄て夕部を照す勢田の橋門火の狼煙
敵味方と計り(三重)別れ行
○大津浦高綱住居の場
比良の暮雪と賞せしも誠の寒さ暮の雪冬多淋敷大津の浦
に世を漕渡る船長の妻も供々外稼内十五の滝くり留主
の手習ひ机の上双紙に六道の切書て天かまの玉鏡を
一人打たり飛廻り遊びに無性なりけり其日も西へ入相
の鐘も散敷花ならで雪解を凌ぐ相合傘餘所の舎に身を寄
て我家に歸る女房お奥津(一)瘴漢戻つたよ」と云聲
聞て玉鏡隠し(益)「お家様能さんたの(よ)「彼奴はい何

ぞ餘所うら来た者の様に而て暗のふ灯も燈さき苦集く
 と何して居る其様も苦集くすると叱れるに依て苦集
 く爲か不爲か(盆)暗がりにしてお前の臍探ふと思ふて
 (一)又癡漢めが灯を燈せ」と云に合点角行燈確黄の花に
 (一)又(盆)又人を饒らんすかいの」と云々戸口指眼(盆)
 門口お誰やら居る誰ぢや何所の人ぢや(一)「那方の傘
 さを浮無心アたお侍ひ様お蔭で雪解を凌まして忝けなふ
 存じます」くお道入成れませ」と云に侍ひ内に入(一)
 是が此方のお宿軒か扱々寄麗なお住居でムりますな(一)
 (一)漸く此頃此家へ参りし故未取締もムりませぬ(一)「
 彦亭主の彦商賣(一)「彦亭主と彦」妻計り替み迎も僅か
 な活計(一)「すりや後家彦(一)「左様でムります(一)
 是はく未お若いに無彦不自由にムらふな(一)「く猶身
 に馴まして指て不自由のムりませぬと此浦風の烈し
 お又しても夜浮が致し心細い折しも誰ぞ力も成て欲
 と「思ふ様な縁も無物でムります」と何所やら旨い咄し

に侍ひ袴揃合せ指寄て(一)我等花岡園部之介と彦浪人未
 だ定まる養も無れば清水の花盛ふ此園部を懸懸ふ短尺
 も有ふりと櫻の枝を見廻ても當世の歌詠姫も無うして閑
 淋しふ暮す某し何と相談する氣のないう」と綱纏掛れ
 此方も打笑(一)聞ませれば貴所のお名の園部様とやら薄
 雪空の相合傘お情深い彦縁の端として何様やら最愛らし
 いお姿と云お顔付女を泥す目元の搦」と溢れ掛りし容形
 に現抜して氣の上釣傍よ癡漢が指眼(盆)「悪い身をす
 る侍ひ丁と股線へ山猫扱た様(一)「又癡漢口叩すと
 爰に用いぬい奥へ行(盆)「已る奥へ行行なら彦が己
 が奥へ行たら扱んた山猫を出しとろぞ(一)「又仇口を」
 と叱れて盆太の奥へ立て行。お奥津門の戸指寄て押入
 明て澤山く取出す浦團打廣げ(一)「寒此様寒い晩の
 少など早ふ寐て肌温めふ」と身を横に成丈堪忍る侍ひが
 青ふなり赤ふなり吐息さへも絶々に(一)「最其所へ道入
 へ」最寐てういな何様も成ぬ」と浦團の内道入にお奥津

が起直り(一)夫ならお前彌々妾を寐る心(一)「心何
 所おやら飛で仕廻て體中が張切る(一)「眞實でムんす
 (一)「眞實共くもう根問せずと一寸寐たい(一)「夫が定
 ならお前へ分て無心が有何と聞て下さんす(一)「聞度て
 も上氣して耳が聞ぬ少々事ならア寐所での事みせう
 (一)「く頼事も頼んでうら何を隠さよ妾の敵討でムりま
 す(一)「よし」敵討香込だ(一)「夫ぢやお依て若敵お出合
 ば助太刀して貰ひお成ぬ夫合点でムります(一)「よし
 く助太刀香込だ(一)「万一反り討み逢時の命を捨て下さ
 んせお成ぬぞ(一)「よし」返り討香込だ(一)「何を
 云ても香込だど大腹中なお人での有(一)「よし」
 大腹中香込だ(一)「そりやお前何云のぢや(一)「何ぢや知
 ぬが早ふ寐たい(一)「よし」知ぬ事を云すとも私敵と云ひ
 兵法の達人助太刀せうと仰やるお前手の内が見度ムんす
 (一)「鉢坊主ぢやなし何の手の内(一)「兵法の彦鍛練が
 (一)「兵法遣ふのうろりや心易い何時なと遣ふて見せう

(一)「左様なら彦手練の程を」嬉しやとやしてから心掛
 ねと竹刀順管の用意もなし何を以て彦手練を(一)「イヤ氣
 遣ひ召んな竹刀順管用意致した(一)「何竹刀を彦用意ど
 (一)「心掛の武士は物竹刀が無て何とせう然も長いと短
 かいが有」と兩腰するりと抜放せば赤鬨でもない備前竹
 光(一)「何と天暗竹刀で有ふ(一)「是がお前の魂ひ
 (一)「魂ひの飛で仕廻て人を欺いぢや(一)「棄憫れて
 物云れぬもう彦手練見るふ及べぬ其お心なら寐て語ろ
 (一)「何ぢや寐やう」忝けな」と云問ふ行燈吹消(一)
 「なせ灯を消た、明くて」恥しいな」と勝手知ねば此所
 彼所ふ尋探る其中お痴漢を竊と浦團の内にお奥津の勝手へ
 探り行。此方の知す高道お探り當る浦團内何か無
 苦集くく道入れお痴漢が大聲上(盆)「盗人め
 出合」と呼べる聲お愕然し倒つ轉つ侍ひ何國とも
 なく逃歸る。後お盆太が高笑(盆)「逃るい」イヤ侍
 ひめ汝が血氣お任せ家尻切ふと掛つても滅多お切れる盆

太ぢや無いお家様も又お家様ぢや何の彼様奴が心を試す事有物で此間うら来奴等も碌な奴一人も無い、隙を遁付且那様が戻て有湯など焚て腰湯さそ」と傍こてく取片付納戸へ入や入さの月影さへ暗くまめくと空に霏つく雪よりも齡の雪を覆ふたる箕笠着たる老人を乗せ我家へ戻り船船を押切て陸の漕付(二)急ぎに程に早舟が着ては則ち是が我等が内くお上り成れませ」と歩板渡せり老人の徐々上る陸の方船頭も纒綱亂杭も縛り付率(二)先(一)女房共戻つたよお客が有何處に居る」と夫の聲も女房夕疾や遅と納戸を出(一)二郎作殿戻らまやんしたう今日の内定し寒うつたでんせう(二)寒い段ぢやない雪の霏つく向ふ風の比敵下して船柄持手も切る様有たれと風も逆ふて船押たので己の寒いを忘れたが貴公ふい嘸お冷成れふ卒先彼處へ」と進められ箕笠脱捨上座も直り(老)一樹の影一河の流れ不思議お亭主の世話と成寒夜の宿過分の至り」と聞て女房惘れ

顔(一)ママ仔細らしい物の云様をして見りや生た兜人形見る様な方ありや、何様でんすぞ(二)何様やら已も知ぬが今日の草津の方軍が有と聞た故何でも其處邊へ居たら能役有ふかと矢橋の留み船付て見合して居る所へ買所が偶然お出成れ何がなし船へ飛乗せ出せ漕と滅多無性お煽られ合点が行ねと、沖へ漕出て扱様子、舟賃遣ふと仰る故畏まつたど精出て押ても漕でも向ふ風一向石山へ舟へ寄す仕様事なし爰迄運まして戻つた今夜、此方にお留し風が和波だら石山へお供する随分浮馳走つて呉」と夫が詞(一)夫の、(二)浮難儀や見ました所が鏝とやらを召てんれ、定て軍奉行の方、左様な事でもなすか」と尋るお老人打點頭(老)推量の通今日の軍お思ぬ敗北夫故斯る世話預る(一)此方人敗北と、何の事ぢや(二)軍お負るを取北と云は(一)や(一)ろんなら買所にお負成れたのう、夫のママ、お笑止や而

て見ました所がお年お不足も成さふな命掛の軍せうよりお子様も有ふお隠居まて、ムれ、敗北とやらも有まいお定てお腹が立でんませうな(老)何の、勝負、時の運お寄一旦の勝より始終の勝と善なるべし計さる今日の戦ひ佐々木四郎が謀計お乗られ味方の大軍大半討れ某し進も無念の敗北陸路の佐々木お切れ石山へも歸り得ず兎や詮方も渚の方十方に暮て漂よ所お幸ひ成渡船危さ難を避しも全く其方が情故」と始終を咄す軍の様子聞て女房が指寄て(一)や其佐々木とやら云人の討死と聞ました、矢張生て居られます(老)然、是迄佐々木を討取しも度々なれど皆影武者の價佐々木六日以前の戦ひも佐々木が悴小四郎と云者を味方へ生捕其砌、討死せし佐々木が首悴小四郎お實檢さすれ、實の親と歎悲しみ直様切腹扱こそ佐々木討取、と安堵の思ふ今日の出陣、又も佐々木お退立られし、幾人有共計なき佐々木が謀計の怖しや」と舌を巻て物語る聞女房が打淵れ(一)今のお咄し

聞お付侍ひと云者の少い子でも軍去て命を捨ると云事、無墓と云ふか可哀と云ふ其親々の身み取て、と云を打消(二)何の掛も掛ぬ餘處の事を、ヤヤ斯お宿すますから、進も、事お貴所のお名を(老)我こそ、と云んとせしが詞を扣(老)端武者なれば嗚呼が問敷(二)成程轉の穂も踏るとやら承ま、つて益ない事定めてお勞で、りませう見苦しけれと與へ、つて、休息なされませんかい(老)何様老躰なれば餘程の勞詞お付て暫らく休息れませ(老)何のよ付て心遣ひ過分、と老人の徐々立て、奥へ入、跡、お女房、く、と思ひ詫たる愛涙夫も思案有顔、手を、指、互、詞、納、戸、より、偶、手、出、る、癡、漢、の、盆、太、重、箱、片、手、お、(盆)お前様お前忘れて、ん、す、り、今日、坊、様、の、一、七、日、の、速、夜、夫、で、一、文、餅、三、ツ、買、て、來、た、程、お、祝、ふ、て、佛、様、へ、進、せ、て、と、云、お、思、い、す、急、上、つ、て、何、に、伏、沈、ひ、(一)幽、艶、い、能、氣、が、付、た、恐、な、我、が、志、し、備、い、で、何、と

せう」と憎々立て押入の襖明れハ釣佛燈淨燈の火ハ有作
 ら濡る香爐の香盛輝知燈院幼童童子佛果の爲と手を合せ
 伏拜目も涙なり(一)中佐々木殿(二)イ(一)イ(二)郎作殿
 お前も此方向て切て一遍の回向なとして下さんせ妾が千
 遍唱るよりお前の只一遍が彼子の功德お成ハいの」と又
 伏沈めバ(二)イ(一)白痴者與お客人もムるお見苦しいお泣
 聲未練な奴」と呵れて(一)イ(一)何程呵しやんしても是が
 泣すお居られよう如何お男のうらげぢや迎お前計の子り
 いな妾が爲も子ぢやいな未年端も得ぬ者彼様〜せ
 いと酷たらしい父の詞を子心ハ大事〜と忘れもせず
 立派お有た其時の妾今お目先お見之何と是が忘れられ
 妾や忘れぬ得忘れぬ」と握と伏敷けバ値恩愛の涙ハ胸ハ
 突掛ながら(二)イ(一)聲が高し解お泣我迎も肉縁の悴不便ハ
 無て何とせう傍で有く見た其方より見すお案じる我心何
 様お有ふと思ふ骨ハ碎かれ身ハ刻まれ肝のたねへ焼金
 を指れる様お有たは」と涙隠せば痴漢ハ目を摩(盆)ア

伶俐な坊様で先頃も己が穴一まて居たれバヨリ痴漢よ穴一
 するも手が下ると云まやつたお依て〜其様高尙事云と
 遂死るぞやと云たれバ己や侍ハの子ぢやお依て死る事ハ
 何共ないが万一死たら無頼様泣まやろなど云まやつた
 涙泣まやろ様お成て退た」と大聲上ておい〜泣(一)イ(一)
 最云て呉を聞程苦しい此胸が裂る様な」と伏沈む涙ハ琵琶
 の湖ハ漣滴る如くなり斯る歎の時しも有長押お掛
 たる鳴子の音風有ぬろ瓦落〜二郎作聞より突立
 上り(高)イ(一)女房城内より知せの早打ハ奥の間よ氣を
 付よ痴漢ハ裏を」と追立遣り戸口を丁と指固め居間の疊
 を刎上れバ下よりぬつと鎧武者(小)今日味方の勝軍言
 上せん」と手を付バ(高)ヤア音高し〜谷村小勝次レテ
 城内お變ハ無や今日の一戦味方の勝利次郎聞ん」も密々
 聲(小)さんい味方軍勢業津の汀ハ屯を構ハ戦ハを催す所
 敵の大軍ハ押寄無二無三ハ駈立る味方ハ態ハ負色見
 せ十町計り引退く勝ハ乘て追來大軍潮の沸ハ異ならず味

方も爰お踏止り火花を散して攻戦ハ仰置れし時分ハ爰と
 と四目結の旗幟と靡せ敵の後ハ大音聲佐々木四郎高綱是
 お有と名乗掛〜驍直ハ駈立れバそりやこそ佐々木が又
 出たぞ謀計ハ乗ぬ内退や〜と我ハ一ハ狼狽ハ後陣より
 大將時政采配振立佐々木迎鬼神みてハよも有と騒な者共
 備へを立て戦へと高らかみ呼ハれ共佐々木と云名ハ聞怖
 し崩立たる敵なれハ耳ハも更ハ聞入す風ハ散行木葉武士
 逃行者ハ目ハ掛す目指ハ時政只一人餘すな洩すな者共と
 稻麻竹葦を取巻シ夕天を暈つて通しか又地を潜て走しハ
 無念乍ら時政ハ討洩しハ」と思續敢訴ふれバ(高)天
 晴高名手拵〜併し時政を討洩せしハ残念至極ハ時政が
 出立ハ(小)鎧ハ緋絨錦の直垂(高)何緋絨に直垂とやシ
 歩立り但ハ騎馬(小)イ馬ハ其場ハ射屈創られ乗替もな
 く身ハ歩立(高)然社〜汝ハ直ハ城内ハ立歸ハ勝軍の
 油断を窺ハ夜討を掛まハ物でもなし力事油断無様ハ變ハ
 らハ早速知せハ早行〜と云洩し指寄て耳ハ口(小)ハ

畏まりハ」と引返して振道へ飛返後の古壘元の如くお押
 直せバ女房篝火勇立簪今ハ注進聞お付割符を合す奥
 の老人時政ハ極つた此家ハ来るハ天の興ハ百万騎より只
 一人を討取ハ四海波風鎮る手柄用意さやんせ四郎殿
 と急立女房騒ハ高綱(高)ハ不討我手ハ落人時政迎も今
 宵ハ過さぬ命(簪)否〜落付も時ハ依油断大敵小敵
 迎侮らすとハ常々お前が救る軍法ハ討給ハ早〜
 と急ハ急立折も有又も知せの鳴子の音四郎心得手取早く
 壘と丁と刎退れハ直と出たる四の宮六郎(ハ)注進」と
 呼るお子(高)ハ汝が五音ハ甚だ不吉心元なし如何に〜
 (六)然ハ城内にハ今日の勝軍何れも酒宴の興を催す中
 お取分和田兵衛殿例の大酒數盃を傾け餘程酒興の折柄ハ
 大江入道銚子杯盞携ハ出和田兵衛の軍功大將感ハ思召
 彦悦ハの酒を下さる頂戴有て然へしと聞より何ハ思慮
 もなく土器取て押戴き丁と受て干給ハハ忽ハ顔色土の如
 く六穴より進る血沙ハ流の如くにて偵ハ強氣の和田兵衛

殿虚空を掲七轉八倒并儘息絶い」と詔る小發と佐々木が
 仰天(高)し其座三浦之助の有命さすや(六)さんい取
 分無残ハ三浦殿毒酒を以て和田を殺せし暴惡不道の大江
 入道摺掛で呉んすと阿修羅王の暴たる如く入道目懸駈
 上る板間ふ兼て落穴陥外して眞逆様下は植たる劔ふ裂れ
 身の寸断ハ三浦の最期皆入道が謀計なれば此上ハ頼
 家公汚身の上も危しハ片時も早く城内へ侵入有て守護
 有べし」と云捨又も引返せば始終此方ハ立聞時政佐々木
 ハ右左呆れ果暫し詞も無りしガ(高)ハ天成りな命成りな
 和田と云三浦と云何も秀る當時の英雄入道なとガ術ふ乗
 しハ能々味方の運の盛此上ハ片時も早く城内へ馳向ハん
 篝火用意ハ」と氣を急折柄俄も表驅敷馬の嘶さ數多
 の人音三騎の旗指物弓鎗持筒引馬の飾も晃つく鎧武者門
 口ハ躍んで(兵)鎌倉の大將時政公此家ハ遁ハ在す由忍ハ
 斥候ガ知せおより彦迎の爲參上す早く彦陣陣然るへし」
 と呼も皆々平伏す内ハ女房ガ猶急立(簪)ハ時政と迎の大



勢此場を助歸してハ龍を淵へ放すも同然サア今の内本望
 くハ」と追急中時政公一間を立出(時)賊ハ危き難
 を遁れ殊に今宵の一宿迄後らぬ亭主ガ情け町人なれば
 寝美ハ此宿邊ハ家屋を數建與ゆる間宿屋敷と云て永く
 所持せよ猶も望の事有ハ重ての沙汰あ及ん去ハ」と
 馬引寄ゆらりと乗ハ諸軍勢四方を圍て立歸る。天の助ハ
 人力の及ハぬ運ヲ頼なき(簪)ハ手に入敵を暗々と還歸す
 ハ何事ガ未練共卑怯共云云れハ腰板武士お前ハ天魔ガ
 魅入しハ情なや淺猿や」と取まむれば莞爾と笑ハ(高)敵
 の謀計ハ着て謀計を行なハ高綱女如きの知事ならず(簪)
 ハ手ハ入敵を暗々と逃すガ謀計ハ謀略ハ(高)ハ今歸つたハ
 時政で無ありや臆者(簪)ハ那時政を臆者とハ(高)ハ是迄
 度々の戦ハ此高綱ハ欺かれ其無念止事を得ず面赤恰好
 似たるを撰時政ハ出立せ今日軍ハ討死させ時政こそ討
 取たりと味方の者に油斷させ其處を討んと云術と疾より
 討知たる故攻口を寛めさせ態と助て此家ハ伴ハ城内の



變々聞せて歸せしハ賊の時政を城内へ偽引出さん我智謀
「と聞ふ扱へど女房が初て悟る夫の心感し入て横手を打
(箒)通れ我夫奇代の計器とんなら和田殿三浦殿も(高)ノ
謀略ハ密なるをよしと云間み取出程が島狙ハ松枝バツた
り人音(箒)や今の敵より入忍の曲者(高)早明方も近付
バ我ハ是より城内へ」と又も壘を明烏可愛くの聲も雅
思出したる小四郎が名ハ消もせて其主ハ親を殺して西方
浄土彌陀の淨國の道法の計知れぬ佐々木が抜道抜目なき
智謀の程こそ(三重)類なき

○坂本城内の場

江州坂本の城とすハ後ハ賊々たる比敵を負前より湖水満
々として日本無双の名城ハ籠籠る源の頼家公數度の軍
お戦ひ勝共目に餘る敵の大軍味方の小勢矢も盡て早落城
と見えふけり城内ハ大江入道源母君を初めとし女中殘
らす居並で頼家公ハ源居間と隔る座敷ハ大廣間今日を最
期の首途とお湯引髪も梳つり留木の御難ハ諸軍勢心時意

(宇)ハ此方からも使ひを以て中よんと思ひし折しも局太
儀ちやハ我君ハハか覺悟能ハ入遊バす(千)ハ左様でム
ります未明より覺悟能只母上様の淨菩提と淨經讀誦遊
バしてムります(宇)ハ自らハ佛果の爲(千)ハと答ふも
尋るも後ハ涙の玉霰(宇)源前へ歸つて中よんハ浄念もヒ
のお使斯成上ハ互ハ言の葉ハ無ハ得共今生の名殘ハ源
顔ハせ今一目見ま欲く候へど入道の計ハ故夫も叶ハす冥
途の旅へ赴きハ必ず母ハ心懸られハ大將たる源身に
いハハ潔ふ源生害を與ハ頼み參す」と云聲涙ハ咽給へ
バ付添女中も一同ハか道理極やと伏沈ハ涙限りの無りけ
り(基)ハ森々い女原局も早く立歸り頼家公ハ早く切腹
成れど云疾々行」と追立られ是非泣々も立て行。後に入
道聲荒らげ(基)泣ても悔んでも最叶ハぬ清潔と歸めて何
方からなりと先陣かまやれ此入道が始めたければ年役な
れハ後のら參る女原ハ誰彼なしに立並んで同一ハ死ハ宇
治の方時移る」と三方取て指付く(基)ハと急追

計りなり。入道母君ハ打向ハ(基)天命とハやしなから和
田佐々木三浦之助已々ハ片意地を云募此入道が下知を用
ひせ其爵で殘す討死所詮開くべし運ならねハ源生害を勤
め參らせ某し迎も後より源供時刻移らバ敵軍爰ハ亂入ん
敵ハ首を渡さんより片時も早く源目害」と頻て勸る入道
ハ底意の程ヲ怖し宇治の方打點頭(宇)和田佐々木三浦
の輩ハ討死せしと有上ハ最早叶ハ味方の運命何惜うらぬ
自らハ命然乍ら已々ハ身ハ始未疎かハなし置ハ是又死後
の物笑ハハ昔の者心殘りの無様ハ銘ハ心付合て自らハ自
害も見届其上ハ心次第必ず速まる事勿れ」と女乍らも上
ハ立心の運與よりも頼家公のお使ハとして局の千草開雅
ハ手を支へ母君様へ我君よりのお使ハ微運ハヤし上るハ
及ハす味方の面々討死の上ハ生害の時節今日潔ふ死出
三途の淨供せん母上様もハ心靜ハ淨用意遊ハせ此期ハ臨
んでハべき事迎ハ彌陀の六字より他事なくハ其旨源肝要
ハ思し召下されよとの源事ハてハ」と涙隠して述べけれハ

立るハ此世から成阿責の鬼。外面ハ修羅の貴太鼓矢叫の
聲響す母君耳を聳て給ハ(宇)ハア不審ハ昨日の軍に和
田三浦を始め佐々木の四郎も討死せし故最早此城保難し
生害せよと入道の勸め誠と思ハ極しに今城外ハ和田佐
々木ハ仄聞えしハ誰ぞ遠見して參られ」と昔て宣ハ詞と
打消(基)ハ和田佐々木三浦を始め其外頼ハ味方の大將殘
らす討死えたり途ハぬ死るのハ悲さに血迷ふた空耳成ん
恠言云ずと早々生害(宇)ハ此實否を亂さぬ内ハ滅多ハ自
害成まいといハ(基)成すハ某ハ介錯」とすらりと扱て切
付るぞつこい左様のハ三方ハ受ても嫩弱女葉強氣の入道
疊掛既ハ危ハ其處へ後方の襖蹴放して佐々木高綱飛で出
入道を取て投退(高)某し始め和田三浦討死と偽りハ二方
に生害勸め夫を手柄ハ時政ハ味方せんとい太い巧ハ是迄
味方の謀計内通えたるも皆汝主を賣の極惡人最早逆ハ
ぬ覺悟せよ」と詰掛られて些少も動せず(基)ハ能推量
汝等ハ忠義立ハ胸惡さに頼家親子が首取て時政公へ降參

せんど心を碎た我術十が九ツ仕貸せし身顯されて残念
く最上ハ死物狂ひ」と佐々木を目掛切付るさ玄つた
りと掻潜り刀を丁と踏落せバ詞ふハ似ぬ大江入道奥を指
て逃行を遁さじ遣じと追て行後ハ母君彦聲高く(宇)ヤ
者共斯る事共知給ぬ頼家公彦身の上氣遣はし此進り進進
ヤせ急げく「小女中達皆々與へ走り行。如何忍び入たり
けん北條時政廣岡ハ駆出(時)入道が知らせ故時政直向
ふたり覚悟せよ宇治の方」と云間も有せず胸板へ登しと
響筒音ハ脆くも息ハ絶果たり(高)ヤお騒ぎ有な宇治の彦
方斯有ん事を察し詰りく「み守護する高綱入道めダ悪工
み如何成事も計られず與へく」と進めやり高綱勇んで
大音上(高)鎌倉の大將北條時政を佐々木の四郎が討取た
り」と高らりく叫れバ主人の敵通さじと援運く切て掛
る(高)ヤ事々しき精兵原一々此世の暇を呉ん」と群中
へ割て入難立く切捲る其太刀風ハ木の葉武士群々を
と逃散バ佐々木も上帯締直し太刀の餘熱を冷さんと様側

お突立折柄矢一ツ來つて高綱が肝のたねあかつきと立
バ喧と語りお咄と伏無墓息ハ絶果たり。誰所爲共白書院
弓矢携へ悠々ど入來る北條時政是迄數度の戦ひに佐々木
め小証られし其返報稻毛前司某しふよく似たるを幸ひ我
姿も出立せ佐々木めに充がいし故誠と思ひ本跡を顯せし
狼狽者和田三浦ハ先達て入道が謀計お死だる由稻毛が咄
お聞たれバ最早高綱只一人と思の外我矢先ハ最期遂し誠
の佐々木今ハ大將一本立(時)ヤ頼家ハ何國ハ在時政直
お見參せん」と呼はりく「奥の方のさく歩む耳元へ又
もどつさり程が島愕然り仰天振返るお花富の鳥威し鏡笠
取て高笑ひ(高)ハ、い、お騒ぎ有な時政公近江源氏の嫡流
佐々木四郎左衛門高綱夫へ參つて彦見參仕つらん」と呼
ひる聲お値の時政仰天有(時)稻毛の前司お勸られ深々と
入來り又も佐々木が術お乘しり思へバ無念と引返す表の
方より和田兵衛三方携へ立出れバ此方よりハ三浦の介長
柄の鉞子携へ出(三)只今城外お放て頼家公實助公彦兄

弟彦對面の上互に和睦相調ふ」と云ふ和田兵衛引取りて
(和)兩將彦心解合からハ時政公にも異議有まじ彦悦び
の彦益々頂戴有」と詞の下佐々木四郎遙に手を突(高)某
し方寸の謀計を以て時政公を城内へ引入しも彦和睦を調
へん爲君彦一人の彦心おて万民塗炭の苦を通る彦承引下
さらハ敵對ヤせし我々彦刑罪お遇迎も聊か恨ぞ存せず」
と詞を盡し理を賣て命惜まぬ三人が忠義を感じて時政公
(時)ハ、通れ成忠臣義士賢朝公彦許容の上ハ某しお何の野
心和睦ハ願ふ所ぞ」と詞ハ三人飛立悦び勇立たる折柄お
軍勢引連大江入道餘すまじ迎追取捲(三人)ヤ物々しや」
と三人が抜放したる太刀風お恐て近寄者もなく入道獨を
引狭み是迄エみし悪の報思ひ知と首打落し悦び勇む和田
三浦佐々木が家の四ツ目結其結ひ目ハ代々迄も解す治る
秋津國榮の岩ぞ目出度けれ (大尾)

明和六巳丑年十二月九日刻成

時代世話劇種本第十四編
○一谷嫩軍記 全一冊 近日出版
右ハ故人並木宗輔が妙案の院本おて源平兩氏興敗の次第
を綴りたれ也專ハ熊谷次郎直實が忠勇義氣を畫し面白
者なり中ハ熊谷陣屋の場お如きハ脱稿の昔より今日に至
るまで諸座お演して毎時大當りをなす事皆さま彦存じの
物なり近日賣出し仕つりハ間向彦彦求彦愛着の程偏ハ願
上奉り也
銀座四丁目十六番地 歌舞伎新報社敬白

今古寶錄第四號
○伊達顯秘錄 上中下三冊内上巻既出版
定價一冊金廿錢
右ハ先代萩の寶錄おて伊達綱宗が三谷通の始より彼名
妓高尾を三股お切殺す件伊達兵部原田甲斐が奸惡顯十代
を毒害せんとするを乳母淺岡侍臣松前鐵之助が守護し因
り其身を全せらるる、物語安藤小十郎が家國の爲ハ肺肝
を砕くの忠義板倉内膳正が、邪なき政道の計ハ悪人亡ハ
善人榮ふる伊達家繁昌の次第を記す古今面白寶錄なり
何卒不相變一覽の程伏て奉願上
三十間堀二丁目一番地 榮泉社敬白
取治十五年四月四日編 定價一冊金廿五錢

出版人 東京府平民 渡邊庄助
東京府橋區銀座四丁目十六番地

東 京 圖 書 館

和 書 門

小 說

類

函

三 六

架

三 〇

號

一 冊